

〇〇  
 鳥のおもてを、約束するこそきのどくなれ、あひそめて後、毎日々かたじけなき御  
 事共也、銀つかふ男、今此目からは、空気のやうにおもはれ待る、其年の霜月二  
 十五日、九軒の紙屋にて、平野の綿屋の吉様にあへども、暮よりかならず御歸、  
 ひそかにまいれのよし、前裁に身をかくし、有様をみれば、久都といふ座頭を  
 して、太夫様のお伽をせよと申付て、吉左もどられし、跡を大事と、はなれぬこ  
 そ、きのどく爰ぞかし、宵は待、夜中過より、降雪袖をはらひ兼、踏石の上なる、  
 引下駄を枕に、凝へていつとなく、夢をむすびぬ、下座敷の床は、扇屋のながつ、  
 馴染の人と寝覺に、障子を明て、下駄はと、禿にとはるゝ時、身をすくめ、椽の  
 下に隠れぬ、世之介が面影を見て、下駄尋ぬるまでもなし、よしと、禿をしづめ  
 給ふは、深き戀しりぞかし、此時のうれしさ、あの君七代まで、太夫冥加あれと  
 ぞ願ふ、二階には、久都はしのこの上り下まで、吟味してをるこそ憎し、吾妻し

んきの片手に、文共引さき、くはんせこよりをのべて、ちいさきかることを仕懸、  
 天目をのせて、暑間の酒をつぎ、我口添て、そろ／＼下へおろせば、世之介此心  
 に感じ、三度戴き、喉通る間の樂、千代も經ぬべし、半分過引て、息をつく所へ、  
 なかつ漬山椒を一房、肴は是にと、小聲に成て給はるこそ、又忝し、夫よりな  
 かつは、二階に世之介を手引して、久都に取付、尤愛らしき坊様、此胸のつかへ  
 を、さすれと、うれしがるやうに、手を取て、  
 〇〇  
 〇〇  
 〇〇  
 〇〇

新町の夕暮島原の曙

浅黄の、あさ上下に、茶小紋の着物、小指脇の仕出し、常とはかはり、ずこし智  
 好色一代男 卷七

惠の有るやうにして、此世の人とも思はれず、娑婆で見た、彌三郎殿の御禮、先御祝儀、さて今日よりは、色里の衣装かさね、これをみる事、命のせんだく、ただぬれつゝぞ、山水の、香ひもふかき、菊の節句の暮けしき、爰にきて、鶯の太兵衛が軒端に、簾を懸させ、姿をほのかに、名をしらぬ、かこゝさへ、是はとこころうごかすは、よき日みるゆへぞかし、ましてや、高間すぐれて、うつくしく、新艘引て、千里を行も遠からず、是や寂光の都、庭には金吾の長持をはこび、井筒屋に、出入やり手迄も、光をかざる、桐のとをもらひ、機嫌のよき顔つきを見る事ぞかし、又所を替て、九軒の住吉やにゆきて、四郎左にせぐる、輕口いはせ、あげ巻につきし、禿のるいにうれしがる、酒を飲せ、はし近く居て、通る程の女郎に、ひとりく、いやがる事をいふて、たちまち罪作らせ、不祥ながら腰懸て、小盃も數かさなれば、下戸ならぬ男のよいをすいたと、兼好といへる太夫が申侍る、其日は扇屋に有しが、にくからぬ首尾ながら、與風都こひしく、おもふこそ

二道なり、此人を捨置、それよりすぐに道頓堀にまかり、疊屋町に、しるべの役者のかたより、科なき身には、しのび駕籠、四人懸りに乗さまに、吉彌と申かはせし事も、戀が替れば、そこくは、言傳して、いそぐ心の夜の道、初夜の鐘のなる時、佐太の天神と申、太夫は居ずとも、のむまいかと、眞柴折くべ、焼味噌あかしく、此酔のうちには、交野さんやも跡に、淀の小橋は霧こめて、鳥羽の戀塚、合點じやと目覺し、ほどなく四つ塚の茶屋あみ戸をあらくたゝき起して、湯まではまたじ、息がさるゝは、水のませと、下々聲々に申侍る、誠に一とせ、森が、道いそぐとて、駕籠の者殺せし野邊も、此あたりとおもひ合、北の空ゆかしく、星のうすさを待兼、丹波口の、小兵衛方に行ば、朝歸の人待貌に、片見世あけて、起出るより、是はめづらしき、御のぼり高橋様も、まちびさしきと、きのふも仰られしに、先きかしまして、よろこばしませいと、門をたゝきて、出口の茶屋につたへて、はや三文字屋に、人をやる、此朝詠のおもしろさ、西行は何しつて、

松島の曙、ささ潟のゆふべを響つるぞ、きのふは新町の暮を見捨、其目をすぐに  
けふ島原の朝明、これが唐にもあるべきや、世之介なんと、尤と、藤屋の彦右衛  
門方に立よれば、夜前の行燈消かたてに、物さびたる、釜はたぎりて、岩倉の松  
茸を焼て、中椀にふたつ飲、是はといふ所へ、歌仙仕合の身清、姿も人のおかた  
めきて、出られける、御名残も今なり、何國へと申せば、我庵はと計、云捨別れ  
侍る、たんの、宇治へはゆくまじ、しらぬ事か、六角堂の裏あたりへ、行人よと、  
申もはてぬに、太夫よりの御使、引舟の對島、三好土佐など、宿よりは次兵衛、  
其外男共伺候して、只あれへと、祭のごとく人橋懸るは、高機今の御威勢也、此  
時の有様、大名もこんな物なるべし、晝寝てまづ、夜の草臥を取かへし、暮より  
おもてに床机をなをさせ、九月十日の月も、いづれ都の風情、高橋、野風、志賀、  
遠州、野世、藏之介がかしこさ、對馬が利發、三よし土佐がつれ弾、大酒に身を  
なし、過し所縁とて、もろこしに笑はせ、かほるが、尻目に懸られ、奥州にうな

づかせ、しのばるゝ事も、おもひをのこさせし事有るべし、女郎のやはらか成所、  
衣類の數を盡し、爰で外は萬あさまに成ぬ、更過て床とるにも、二つ蒲團替夜着、  
枕も常ならず、寢巻もありといふ物もなく、かしらから帯ときて、萬事はつき添  
女郎に身をまかせ、たばこも手してはつがず、ね道具も人にさせられ、やさしき  
おことばを聞ね入にして、結構な夢をみる事ぞかし

# 好色一代男

## 卷八

### 目録

五十六歳

らく寝ねの車  
末社厄神参やくじんまみりの事

五十七歳

情なさけのかけるく  
江戸小紫むらさきの事

五十八歳

一盃はしたらいて戀里  
島原よし崎しまの事

五十九歳

みやこの姿人形  
長崎丸山の事

六十歳

床のせめ道具  
女護の烏わたりの事

らく寝の車

人の内には、かならず死しの残ごつて居る婆々あり、世は物にかまはぬがよしとて、松計はかりの山にもおもしろからず、物の自由じゆうをこしらえ、揚屋といふ事、むかし誰かたれははじめて、年の若わかふなるたのしみ所、遠とほかりし龍宮淨土りゆうぐうじやうどを望のぞみ、氣立きだてのしれぬ、乙姫ひめにあふよりは、しれた丸屋まるやの口鼻くちばしがましと、末社まつしゃあつまりて、けふ程ほどの隙ひま又またと有あまじと、神樂かぐらが申出して、岩清水いはしみづに詣まよでて毎日まいにちつく空言うそを神かみぞしるらん、厄やくはらひに、いざ思おもひたち、明日あすは十九日、人の埃ほこりをかずくもよしなし、夜宮よみやにといふ、道みちすがら酒さけも飲のまれて一所いここに咄はなしながら、参まゐらるゝ事ことかな、世之介よせのすけ様の智恵ちゑを、中間まから借かりましたひと申まをす、行人ぎやうにんが水へ入るよりやすひ事と、御供ごこう申せし手代てだいに、それとあれば、かしまつて、物陰ものかげより、兩の手をひろげて見すれば、神樂錢かぐらぜに一貫いっくわん心得こころえて、それでは、たらぬ顔かまして、かぶりふる、懐ふところより是これを初尾はつおと、金子かねす十兩じゅうりやう投なげ

出せば、諸願成就、こんな御無心ばかり申と、歡びの舞の袖、立睨で、車をか  
れと鳥羽に歸るを招き、車三輛のうへに、花氈をしかせ、太夫様かたへ申遣し、  
一様に、水色の鹿子、白縮緬の投頭巾を着て、四人宛二輛にのりて、一輛には、  
樽折重肴、枕箱燭臺に、大蠟燭を立、出口の門より、はや引懸、飲懸、なごり  
おしさは、朱雀の細道すぎて、大みや通を南かしらにひかせ行、内裏様の國なれ  
ばこそ、餘所てなる事かと、有難くかたじけなく、寒る月の出れば見わたす、竹  
田の葉末に夜あらしの通ひ、袖おのずからしめりて、なげかぬ泪かとおもはれ、  
引手の音もとまり、あまり慰すぎて、氣鬱かりき、南を見れば、小田井の道橋の  
詰に、提燈ひかりをはなつて、彼里の紋盡し、是はときけば、太夫様がたより、  
おの／＼様見送りて爰にてさゝを進ませせいと仰けると、やり手九人、車とめ  
て、風林の松、夜寒のもてなしに、京よりいくつか、蒲團もたせて、草の戸の内  
に、置火燧を仕懸、くゝり枕もありて、爰に一寢入とは、夢をすゝめられ、銀の

間鍋に、名酒の数々、木具こしらへの茶漬めし、雁の板焼に、赤鯛を置合、しほ  
らしき事どもありて、跡にはめい／＼呑の、色服紗、吞すての煙草盆、いづれか  
のこる所もなし、間もなき内に、懸る御事ども出来侍るは、大形ならぬ、御こゝ  
ろの付やう、こと更こたつの御禮は、外に申上たしと、又車をはやめてゆく、世  
之介申は、今宵の馳走、身にあまつてよろこばし、何か門歡に、成るべき事のあ  
りや、唯今たくめといふ、彌七日本一の饅頭ありと申、それはときけば、一つを  
五匁宛にして、上を金銀にだみて、其數九百、二口屋能登に申付て、夜中にこし  
らへさせ、太夫九人の方へ、送りまいらせける、太鼓共も御土産にとて、ちいさ  
き弓矢に、蘇民將來の守をとゝのへて、行末ながく、御息災に、身あがりも遊ば  
さず、手形の十年より外に、年切まして、御勤のうち、口舌もなきやうにと申  
て、太夫さまかたへ、進上申、なを御祈念の御ため、女郎長久

## 情のかけろく

其乗懸を、三條の橋にまたせ、財布はついて有か、今そこへゆくぞと、聲聞しく、小者に申付て、世之介様へ御暇乞に參ました、俄に江戸へ下るのよしにて、日來目懸し、仕立物屋の十藏といふもの、立ながら御見舞申て、追付罷のほりましてと申、取あへず路銀などくれて、門口に出るを呼返して、此たびは何のためにと下るといふ、されば、小むらさきさまにあひまして、初對面から、わたくしはふられますまいと、智恵自慢申懸り、去御方より、二十日鼠の宇兵衛を、目付にあそばし、かけろくに仕り、江戸へよね狂ひにまいると申、さても氣なやつかな、其かちまけはときく、身ともがふられませねば、木屋町の御下屋敷をもらひます筈、又負ましたればと、顔の色青ふなして、聲をふるはず、隠さずとも申せ、別の事でも御座りませぬ、ふられましたれば、命にはかまひのなさやうに、作藏をさら

れます、御契約とかたる、よい戲氣とおもひ、銀つかふて、慰にすると見へたり、其相手はと問ども申さぬがためといふ、一生の一大事は也、よく／＼觀念して、未定めなき作藏なれば、かり首に、珠數を懸させ、跡に残して、誰にとらすべし、惜まず共、日外とらしたる、緋綸子の、犢鼻褌かゝせと申せば、律義なやつで、唯今まで、いさみしが、汗をこぼす、さらばといへども、後へも先へもゆかず、見るに笑しく、是は一興あり、同道して下らんと、常の風情にて、乗物こしらへさせ、十藏を召連て下りぬ、本町四丁目の店につきて十藏宇兵衛を仕立、吉原へつかはしける、首尾こゝるもとなし、揚屋利右衛門に尋、京よりの添状つかはし、十藏を宜敷大臣と申、むらさき様を頼むのよし申せば、内義四五日の内を請合、日を定てかへる時、江戸になひめづらし物じやと、亭主に一包はづむ、宇兵衛が戻さまに、金の出しやうがはやひとしかれば、金ではない、此程京での仕出し人の重寶に成物といふ、上書に古釋と記す、明て見れば扇の要、目釘竹、針、さ

ぬの糸、餅粘、耳搔、うち齒枝、七色ありて、代三文、なんと、是は人のうれしが  
 がる物といふ、返事もせず、あきれて連てもどる、其後約束日參て、太夫様にあ  
 ひて、酒おもしろうまはる時、十藏手をさして、むらさき様お一つまいれと、あ  
 らく押えて、襟から膝くだり打翻し、たんと、きのどくがる顔つき笑し、太夫く  
 るしからぬと座を立て、行水とれとて、湯殿に入、さいぜんの衣裳付、少も替す、  
 肌は白綸子、中は紅鹿子いつかへし、上は淺黄八丈の八端懸、召かへられける、  
 又上方女郎のせぬ事也、同し着物揃て有し事このもし、初てはどれとても寢道具  
 も出ず、太夫寝ころびて十藏を呼て、しみくとかたり懸、○○○○○○○○○○○  
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○終にかやうの事なし、  
 宇兵衛不思議におもひ、宿に歸てかたる、世之介かさねて尋ければ、やうす見る  
 にすこしたらぬ人を、賭にして遣しけると、さながら見へますによつて、先さま

の人、憎さにもくし、あんな男に、あふてとらしましたといふ、世之介、横手を  
 うつて、何をか隠すべし、京よりそればかりに、あれは下りけると申、其跡色々  
 くだきても逢ず、心にくき女是也

一盃たらいて戀里

難波男、吳服物とのえにのぼりて、室町に有しが、それより後はと、世之介か  
 たへ尋けるに、けふは東寺の御影供いざと誘引ける、其日の亭主は、御出入申紙  
 屋の吉介五人前をこしらへ、畜生門の邊に、幕うたせて、誠に佛法の晝なり、人  
 は入口のごとく、誰か一人も、世にとまらるべし、ほうれんさうのひたし物、椎  
 茸などにて、飲懸、ありかたひ咄ばかりして、いづれも酔て立さまに、世之介  
 盃を亭主にさして、おさめといふ、御意次第と戴て、一つ請る時、酒半もなし、  
 是ではさみが悪い、酒とつてこいと、又調に遣し、事新しくして、焼鹽にて飲出



し、まんまと夢になりぬ、此まゝは歸らずか島原へをせし尤と、八文字屋にゆきて、ある者千人でも呼と申せど、紋日の事なれば、名所は一人もなし、おもはしからぬ天神取集て、是でも埒あかぬぞや、身共はともあれ、大坂の客に、すこの内の、淋しき事のおかしからずと、太夫のうち貰ひ懸れどもならず、喜右衛門北の御方出られて、大坂よりおのぼり遊しました、吉崎様と申太夫様、今日水揚にて、丸屋七左衛門方に、御出なされて御座りますが、唯今御内證さかしました、是には様子ありて、もらひがなりさうに御座りますといふ、はじめより、もめる事なれば、それよかるといふ、聲のしたより、七左へ人橋懸て、御座るになつてきた、常の女郎狂ひと替り、水揚の定まり、太夫に引舟、天神二人添て、九日のつゞき、宿への進上、下々への遣し物、奢第一の世之介が、肝煎程に、よろづ官活に申付て、紙に書てまづよろこばしける、亭主袴肩衣、女房は着物あらため、置わたして、臺所に、大らうそく、明りを走る、八百屋、肴屋、いさみを

なして、しやしやうの庖丁人、此威勢、一世の思ひ出也、懸る所へ、太夫様の御座敷こしらえに、まいるのよしにて、末の傾城四人まいりて、衣桁に十二の袖を懸、こよぎ山をかさね、小蒲團錦の峯のごとし、床には懸物、書棚、香箱、文匱、煙草盆、其外手道具、時代蒔繪をひからせける、屢しありて門口より、聲々に申つゞき、太夫様御機嫌よく、是へお出と申せば、ふたつ手燭を先にたて、階の子静に上せられ、上座の中程に御なほりあそばしける、左の方に、一家の女郎十一人、おくりまいらせて座する、右のかた、うしろより末座まで、かこの女郎十七人、皆緋むく着、並居る、御前に、引舟の女郎、禿、手つかえて座する、口鼻出て御引合申、めづらしき出合と大坂にて見知ながら、申侍る時、烏臺、金の大土器、祝言のごとく、銚子、くはえの、酒過て色なほし風情ありて、太夫様より、宿への、時服庭錢まきちらす、禿やり手御供の男ども、上も下へと返す、方々よりの進物、廊下に置つゞけて帳付女、取つゞきの女、ちいさい目からはおどろくべし、

相生の松風、小歌の聲ぞたのしむ

都のすがた人形

貨物取に、長崎へ下る人に、我も跡よりのおもひ立あるのよし、銀箱さきへ、預て遣し侍る、何か唐物御望あそばし候と尋ければ、日本物を買べきなげ銀と仰られける、さては丸山の御遊山計の、御こゝろさしありや、まなく、あれにてまちたてまつるのよし、六月十四日、けふは都の詠のこす、月鉾のわたる時、我は玉鉾の商ひの道、いそぐとて先立ぬ、世之介はおもふかぎりありとて、金銀洛中に蒔ちらし、社塔の建立常燈をとほし、役者、子供に、家をとらし、馴染の女郎は、其身、自由にしてとらせ、毎日遣ひ崩せども、まだ残る所の内藏、何にかすべし、さらば此度長崎に下り、よろしき慰の有事もと、おもひ立は八月十三日、いにしへ安部仲麿は、古郷の月を、おもひふかくは讀れしに、我はまた、あつちの月、



おもひやりつると、淀の川舟、大坂の南の岸に着て、よき野郎の方に、二三日盃入、こゝろのある亭主ぶり、暇乞の、床はなる、時、金子五百兩送られける、惣じて、役者子共の世の暮し、けふあつて、明日は雪の柳のごとし、きれいにほどなくもとの木男となりぬ、或時は鶏をすき植木をすき、はや其家を賣、京に住、江戸より大坂に宿を替、一生所を定ず、何の罪なき、銀もなきもの也と、兵四郎が笑はせて、舟はたまでおくられ、風もこゝろして、時津海、浪をならさず、こころざす所の大湊に着にけり、入口の櫻町を見わたせば、はやおもしろうなつて来て、宿に足をもためず、すぐに丸山にゆきて見るに、女郎屋の有様聞及びしよりは、まさりて、一軒に八九十人も見せ懸姿、唐人はへだたりて、女郎替りけるとかや、戀慕ふかく、中々人の見る事も惜み、晝夜共に、其薬を吞ては飽ず枕をかさね侍る、日本人のならぬ事は是也、紅毛は出島によふて戯れ、上方の町宿へも、自由に取よせ、豊なる事共こそあれ、京にて色川原色里にて一座せし人々、

世之介下りをめづらしく、女郎共に能をさせて、御目に懸るのよし、庭に常舞臺ありて、囃しがた地謡もとより、太夫、脇、番組して、定家、松風、三井寺、かれ是三番しめやかに、物調子、一際ひくうして、なをやさしく又あるまじき遊興也、折節初紅葉の陰に、自在をおろし、金の大間鍋、もろこしの酒功讚を遷すとて、遊女三十五人もひくの出立、紅井の綱前だれ、より金の玉だすき、あや楳のおもひ葉をかざし、岩井の水は千代ぞとて、亂れ遊びの大振舞、我京にて、三十五兩の鴉を焼鳥にして、太夫の肴にせし事も、今此酒宴におどろき、風俗も替りて、しほらしと譽れば、都の女郎様がたの、風情が見たひとといふ、それこそわけ知の世之介様に、尋ねられといふ、幸このたび持せたる物有とて、長櫃十二さほ運ばせ、此中より太夫の衣裳人形、京で十七人、江戸で八人、大坂で十九人、彼舞臺に、名書てならべける、めいくの仕出し、顔つき、腰つき、ひとりく替て、所によりて是は誰、それはどなた、いづれかいやらしきはあらず、長崎中

寄て、詠め暮しつ

床の責道具

合二萬五千貫目、母親より、ずいぶん遣へと、譲られける、明暮たはけを盡し、それから今まで二十七年になりぬ、まことに廣き世界の遊女町、残らず詠めぐりて、身はいつとなく戀にやつれ、ふつと浮世に、今といふ今、こゝろのこらず、親はなし、子はなし、定る妻女もなし、情念見るに、いつまで、色道の中有に迷ひ、火宅の内の、やけとまる事をしらず、すではや、くる年は、本卦にかへる、ほどふりて、足弱車の音も、耳にうとく、桑の木の杖なくては、たよりなく、次第に笑しうなる物かな、おれ計にもあらず、見及びし女の、かしらに霜を戴き、額にはせはしき浪のうちよせ、心腹の立ぬ日もなし、傘さし懸て、肩くるまにのせたる娘も、はや男の氣に入、世帯姿となりぬ、うつれば替つた事も何か此うへ

には有るべし、今まで願へる種もなく死だら鬼が喰ふまでと、俄にひるがへしても、有難き道には入難し、あさましき身の行末、是から何になりとも、成るべしと、ありつる寶を投捨、残りし金子、六千兩、東山の奥ふかく、堀埋めて、其上に、宇治石を置いて、朝顔のつるをははせて、かの石に一首きり付て讀り、夕日影、朝顔の咲、其下に、六千兩の光残してと、欲のふかき、世の人にかたられけれ共、所はどことも、しれ難し、それより世之介は、ひとつこゝろの友を、七人誘引あはせ、難波江の小島にて、新しき舟つくらせて、好色丸と名を記し、緋縮緬の吹貫、是はむかしの太夫、吉野が名残の脚布也、幔幕は過にし女郎より、念記の着物ぬい織せて、懸ならべ、床敷のうちには、太夫品定のこしばり、大綱に、女の髪すぢをよりませ、さて臺庭には、生舟に鱒をはなち、牛房、薯芋、卵を、いけさせ、檜床の下には、地黄丸五十壺、女喜丹二十箱、りん玉三百五十、阿蘭陀糸七千すぢ、生海鼠輪六百懸、水牛の姿二千五百、錫の姿三千五百、革の姿八

百、枕繪二百札伊勢物語二百部、犢鼻褌百筋、のべ鼻紙九百丸、まだ忘れたと丁子の油を二百樽、山椒薬を四百袋、ゑのこづちの根を千本、水銀、綿實、唐がらしの粉、牛膠百斤、其外色々品々の責道具をとゝのえ、さて又、男のたしなみ衣装、産衣も數をこしらえ、これを二度、都へ歸べくもしれがたし、いざ途首の酒よと申せば、六人の者おどろき、爰へもどらぬとは、何國へ、御供申上る事ぞといふ、されば浮世の、遊君、白拍子、戯女、見のこせし事もなし、我をはじめて、此男共、こゝろに懸る、山もなければ、是より女護の島にわたりて、抓とりの女を見せんといへば、いづれも歡び、譬ば、腎虛して、そこの土となるべき事、たま／＼一代男に生れての、それこそ願ひの道なれと、戀風にまかせ、伊豆の國より、日和見すまし、天和二年、神無月の末に行方しれず成にけり



跋

二柱のはじめは、鏡臺の塗下地とおぼえ、稻負鳥いなおせどりは羽のない牛の事かと、吾す  
 む里は、津の國櫻塚の人にたづねても、空耳潰そらみつぶして、天に指ゆびさし、地に土け放  
 れず、臂ひじをまげて、桔槔はねつるべの水より、外をしらず、ひろき難波の海に手はとどけ  
 共、人のこゝろは、樹くがたくて、くまず、或時、鶴翁の許に行て、秋の夜の樂  
 寢、月にはさかしても、餘所には洩もさぬ、ひかしの文枕と、かいやり捨られし  
 中に、轉合書のあるを、取集て荒猿あぐまに寫して、稻臼いなうすを挽ひく葉は鼻はなに、讀よてさかせ侍  
 るに、嫁よめ誘そしり、田より駈かけあがり、大笑ひ已やまず、鐵てをかたげて、手て加かつぞかし

落月庵西吟

大坂思案橋荒砥屋

天和二年壬戌陽月中旬

孫兵衛可心板

好笑りやうの人にん也や  
 笑入わらひに



# 好色五人女

卷一

ひめぢに  
すげがさ  
姿姫路清十郎物語

## 目録

- 一 戀は闇夜を晝の國  
室津にかくれなき男有
- 二 くけ帯よりあらはるゝ文  
姫路に都まさりの女有

三 太鼓に寄る獅子舞

はや業は小袖幕の中に有

四 状箱は宿に置いて来た男

心當の世帯大きに違ひ有

五 命のうちの七百兩のかね

世にはやり歌聞けば哀有

戀は闇、夜を書の國

春の海しづかに、寶船の浪枕、室津は賑はへる大湊なり、爰に酒造れる商人に和泉清左衛門と云ふあり、家營えて萬に不足なし、然も男子に清十郎とて、自然と生れつきて昔男をうつし繪にも増り、其さまうるはしく、女の好ぬる風俗、十四の秋より色道に身をなし、此津の遊女八十七人ありしを、何れかあはざるはなし、誓紙千束につもり、爪は手箱に餘り、切せし黒髪は大綱になはせける、是には格氣深き女も繋がるべし、毎日の届け文一つの山をなし、紋付の送り小袖その儘に重ね捨てし、三途川の姥もこれ見たらば欲を離れ、高麗橋の古手屋もねうちは成まじ、浮世藏と戸前に書付て詰置きける、此たはけいつの世にあがりて請くべし、追付勘當帳に付てしまふべしと、見る人は是を嘆きしに、やめ難きは此の道、其頃ほみな川といへる女郎に相馴れ、大方ならず命にかけて人の誇り、世の取沙汰何



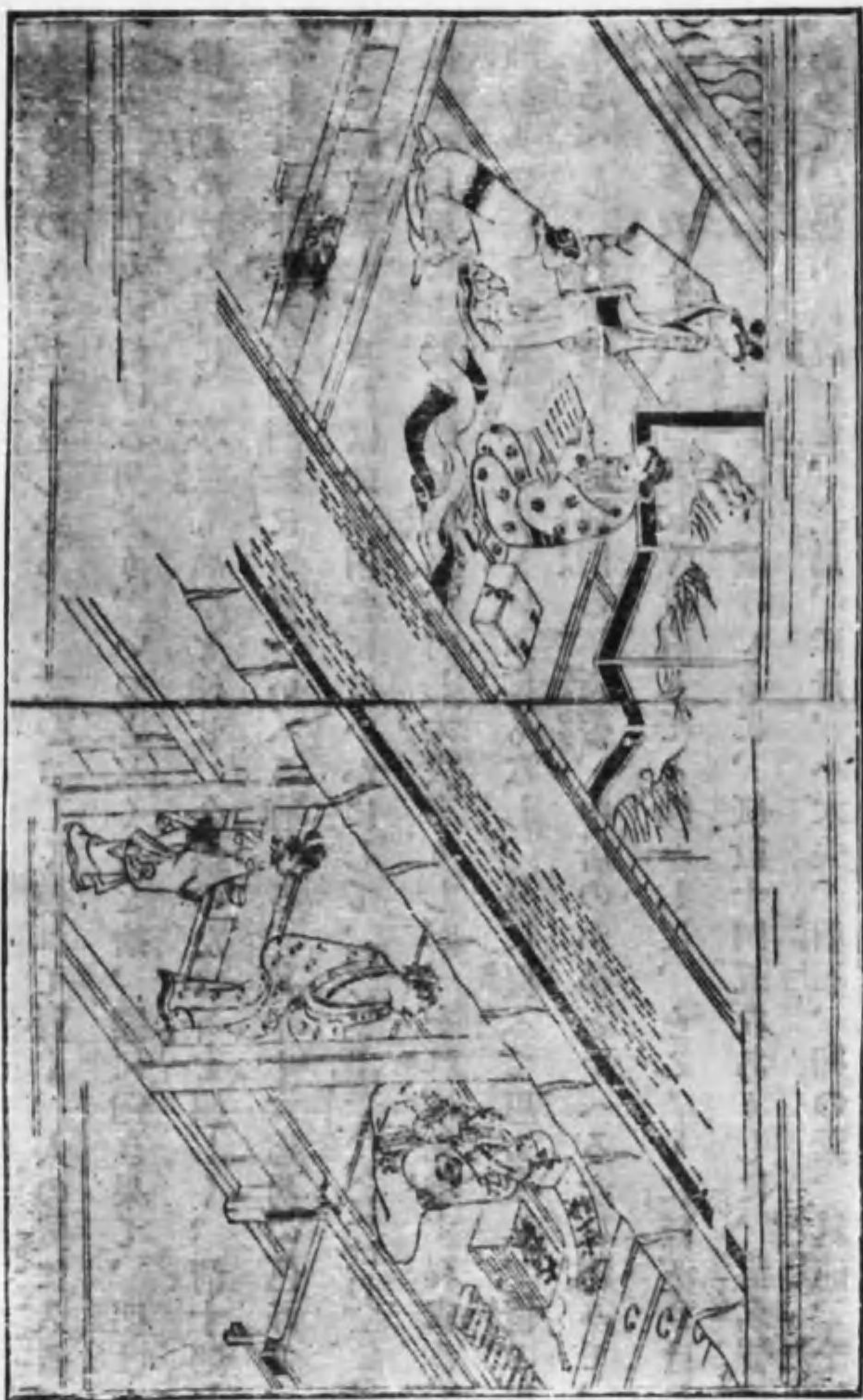
とも思はず、月夜に提燈を晝ともさせ、座敷の建具さし籠め、晝のない國をして遊ぶ所に、黯き太鼓持をあまた集めて、番太が拍子木蝙蝠の鳴くまね、遣手に門茶を焼せて歌念佛を申し、死もせぬ久五郎が爲めとて尊靈の棚を祭り、楊枝もやして送り火の影、夜する程の事を仕盡して後は、世界の圖にある裸島とて、家内残らず、女郎はいやがれど、無理に帷子脱がせて、肌の見ゆるを恥ぢける、中にも、吉崎と云へる十五女郎年月隠し來たりし腰骨の白なまづ見付て、生ながらの辨才天様と、座中拜みて興覺めける、その外氣をつくる程見苦しく、後は次第にしらけておかしからず、かゝる時清十郎親仁腹立かさなり此宿に尋ね入り、思ひもよらぬ俄風、荷をのける間もなければ、是で焼止まります程に許し給へと、さまく、詫ても聞かず、兎角はすぐに何方へもお暇申して、さらばとて歸られける、みな川を始女良泣出して譯もなふなりける、太鼓持の中に闇の夜の治介と云ふもの少しも驚かず、男は裸が百貫たとへてらしても世は渡る、清十郎様せき給ふな

といふ、此中にもおかしく、是を肴にして、又酒を呑掛け、せめては憂きを忘れける、はや揚屋にはげんを見せて手扣きても返事せず、吸物の出時淋しく、茶飲もと言へば兩の手に天目二ツ、歸り様に油火の灯心を滅して行く、女郎それ／＼に呼びたつる、さても／＼かはるは色宿のならひ、人の情は一步小判あるうちなり、皆川が身にしては悲しく、ひとり跡に残り涙に沈みければ、清十郎も口惜きとばかり言葉も命は捨つるに極めしが、此女の同じ道にといふべき事を悲しく、とやかに物思ふ中に、みな川色を見すまし、方様は身を捨て給はん御氣色、去迎は／＼愚なり、我身事も共にと申したき事なれ共、いかにしても世に名残あり、勤はそれ／＼に替心なれば、何事も昔々是迄と立行く、さりとはおもはく違ひ、清十郎も我を折て、いかに傾城なればとて今迄のよしみを捨て、浅ましき心底、かうはあるまじき事ぞと、涙をこぼし立出る所へ、みな川白装束してかけ込み、清十郎にしがみつき、死なずにいづくへ行給ふぞ、さあ／＼今ちやと剃刀一對出し

ける、清十郎又さしあたり是はと悦ぶ時、皆々出合、兩方へ引わけ、皆川は親方の許へ速歸れば、清十郎は人々取まきて内への御説言の種にもと、且那寺の永興院へ送り届けける、其年は十九、出家の望衰にこそ

くけ帯よりあらはるゝ文

やれ今の事ぢやは、外科よ氣付よと立ち騒ぐ程に、何事ぞといへば、皆川自害と皆々嘆きぬ、まだどうぞといふ中に、脈が上るとや、さても是非なき世や、十日餘りも此事をかくせば、清十郎死に後れてつれなき人の命、母人の申越されし一言に、惜からぬ身をながらへ、永興院を忍び出で、同國姫路によしみあれば、ひそかに立退き、爰に訪ね行きしに、昔を思ひ出て悪しくはあたらず、日數經りけるうちに、但馬屋九右衛門といへる方に、見世を任する手代を尋ねられしに、後俊はよろしき事にもと頼みにせし宿の肝煎られて、始めて奉公の身とは成りける、



人たるものゝそだち賤しからず、志やさしく優れて賢く、人の氣に入るべき風俗なり、殊に女の好ける男ぶり、いつとなく身を捨、戀に飽き果て、明けくれ律義構へ勤めける程に、亭主も萬事を任せ、金銀のたまるを嬉しく、清十郎を末々頼みにせしに、九右衛門妹にお夏といへる有ける、其年十六迄男の色好て、今に定まる縁もなし、されば此女田舎にはいかにして、都にも素人女には見たる事なし、此まへ鳥原に上羽の蝶を紋所に付し太夫有りしが、それに見増す程成る美形と、京の人の語りける、一つ／＼いふ迄もなし、是に擬へて思ふべし、情の程もさぞ有るべし、ある時清十郎龍門の不斷帶、中居のかめといへる女に頼みて、此幅の廣さをうたてし、よき程にくけ直してと頼みしに、そこ／＼にほどきければ、昔の文名残ありて取亂し讀み續けゝるに、紙數十四五枚ありしに、當名皆清さまとありて、裏書は違ひて、花鳥、浮舟、小太夫、明石、卯の葉、筑前、千壽、長州、市之丞、こよし、松山、小左衛門、出羽、みよし、みな／＼室君の名ぞかし、何

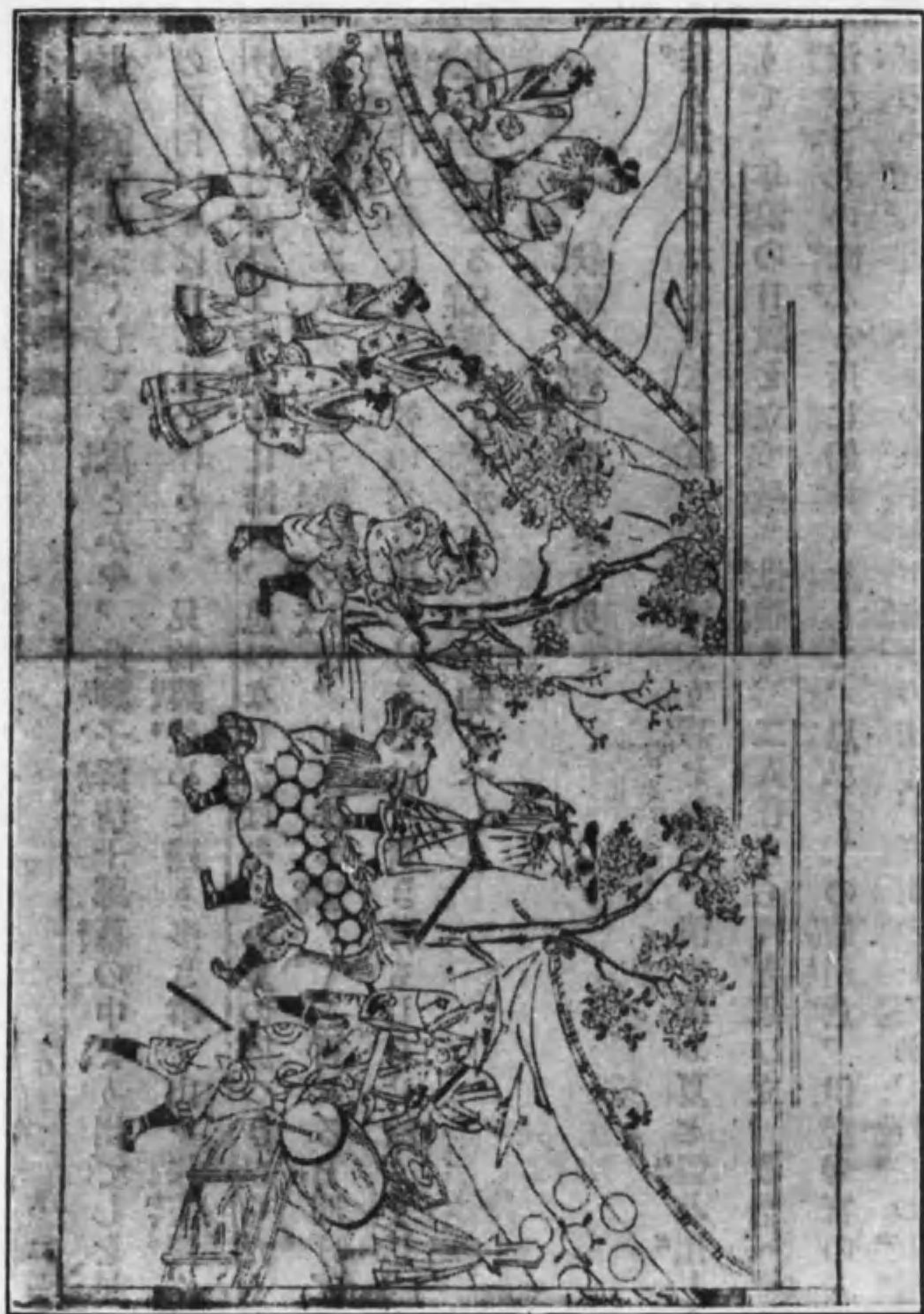
れを見ても皆女郎の方より深く昵みて、氣を運び命をとられ、勤の艶らしき事はなくて、誠を籠めし筆の歩み、是なれば傾城とても悪からぬものぞかし、又此男の身にしては浮世狂ひせし甲斐こそあれ、さて内證にしこなしのよき事もありや、女の冷く思ひつくこそゆかしけれと、いつとなくお夏、清十郎に思ひ付き、それより明暮心を盡し、魂身の中をはなれ、清十郎が懐に入て、我は現が物いふ如く、春の花も闇となし、秋の月を晝となし、雪の曙も白くは見えず、夕されの時鳥も耳に入らず、盆も正月も辨へず、後は我を覺えずして、耻は目よりあらはれ、いたづらは言葉に知れ、世になき事にもあらねば、此首尾何とぞと、つき／＼の女も哀れに痛ましく思ふうちにも、銘々に清十郎を戀詫び、お物師は針にて血を搾り心の程を書遣はしける、中居は人頼みして男の手にて文を調へ袂に投げ込み、腰元は運ばでも苦しからざりき茶を見世に運び、抱姥は若子様に事よせて近寄、お子を清十郎に抱かせ、膝へ小便しかけさせ、こなたも追付あやかり給へ、私も

美しき子を産んでからお家へ姥に出ました、其男は役に立たずにて、今は肥後の熊本に行きて奉公せしとや、世帯やぶる時分、暇の状は取て置く、男なしぢやに眞におれは生れ付こそ横太れ、口小さく髪も少しは縮みしにと、舌たるき獨言いふこそおかしけれ、下女は又それ／＼に、金杓子片手に目黒のせんば煮を盛る時、骨頭をえりて、清十郎にと氣をつくるもうたてし、あなたこなたの心入、清十郎身にしては嬉し悲しく、内方の勤めは外になりて、諸分の返事に隙なく、後には是もうたてくと、夢に目を明く風情なるに、猶ほお夏便を求めて數々の通はせ文、清十郎もや／＼となりて、御心には従ひながら、人目せはしき宿なれば、うまい事は成難く、瞋恚を互に燃し、兩方戀に責められ、次第瘦にあたら姿の替り行く月日のうちこそ是非もなく、やう／＼聲を聞きあひけるを楽しみに、命は物種、此戀草のいづどは靡きあへる事もと、心の通路に兄嫁の關を据ゑ、毎夜の事を油斷なく、中戸をさし、火用心めしあはせの車の音、神鳴よりは恐ろし

## 太鼓による獅子舞

尾上の櫻咲て人の妻のやうす自慢、色ある娘は母の親ひけらかして、花は見ずに見られに行くは今の世の人心なり、兎角女は化物、姫路の於佐賀部狐もかへつて眉毛よまるべし、但馬屋の一家春の野遊びとて、女中駕籠吊らせて、跡より清十郎萬の見集めに遣はしける、高砂會根の松も若縁立て、砂濱の氣色又有るまじき詠めぞかし、里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ、松露の春子を採る杯、葦芽花をぬきしや、それ珍らしく、我もとり／＼の若草少し薄かりき所に花薙、毛氈敷かせて、海原静に夕日紅、人々の袖を競ひ、外の花見衆も藤山吹はなんとも思はず、是なる小袖幕の内ゆかしく、覗き後れて歸らん事を忘れ、樽の口を明けて酔は人間の娛しみ、萬事なげやりて此女中を、けふの肴とてたんと嬉がもぬ、こなたには女酒盛、男とては清十郎ばかり、下々天目香に思ひ出申して、夢を胡蝶に

まけず、廣野を我物にして息杖ながく樂しみ、前後も知らず有りける、其折柄人  
むら立て、曲太鼓大神樂の來り、各々の遊び所を見掛け、獅子頭の身振り、扱も  
扱も仕組みて、皆々立ちこぞりて、女は物見だけくて、只何事をも忘れ、ひたも  
の所望くくと止む事を惜みけり、此獅子舞も一つ所を去らず、美曲の有る程は盡  
しける、お夏は見ずして獨幕に残りて、齒齒の痛むなど少しなやむ風情に、袖枕  
取亂して、帯はしやらほどけを其まゝに、あまたのぬぎ替小袖を積み重ねたる物  
蔭に、現なき空腑心にくし、かゝる時早業の首尾もがなと氣のつく事、町女房は  
またあるまじき粹様也、清十郎お夏ばかり残りおはしけるにこゝろを付、松むら  
むらとしげき後道より廻りければ、お夏招きて結髪ほどくるも構はず、物も言  
はず、兩人鼻息せはしく、胸ばかりおどらして、幕の人見より目をはなさず、兄  
嫁こはく、跡のかたへは心もつかず起ささまに見れば、柴人一荷を下して鎌を握  
りしめ、禪動かしあれはといふやうなる顔付して、心地よげに見て居るとも知ら



ず、賊に頭かくしてや尻とかや、此獅子舞清十郎幕の中より出でしを見て、肝腎の面白い半ばにて止めけるを、見物興覺めて残り多き事、山々に霞深く、夕日傾けば萬を仕舞うて姫路に歸る、思ひなしかはや、お夏の腰つきひらたくなりぬ、清十郎跡にさがりて獅子舞の役人に、けふはお影くと言へるを聞けば、此大神樂は作り物にして手管の爲に出しけるとは、賢き神もしらせ給ふまじ、ましてや走り智恵なる兄嫁などが何として知るべし

状箱は宿に置いて來た男

乗りかゝつたる舟なれば、飾磨津より暮を急ぎ、清十郎お夏を盗み出し上方へ上りて、年浪の日數を立て憂き世帯も、二人住ならばと思ひ立、取あへずも狩衣、濱びさしの幽なる所に船待ちをして、思ひくの旅用意、伊勢參宮の人も有、大坂の小道具賣、奈良の具足屋、醍醐の法印、高山の茶筌師、丹波の蚊屋賣、京の

吳服屋、鹿島の言觸、十人寄れば十國の者、乗合船こそおかしけれ、船頭聲高にさあ〜出します、銘々の心祝ひなれば、住吉様へのお初穂とて、杓振つて、又頭數讀みて、呑むも飲まぬも七文づゝの集錢出し、燗鍋もなく小桶に汁椀入れて、飛魚のむしり肴、取急ぎて三盃機嫌、各々のお仕合、此風真臈で御座ると帆を八合もたせて、はや一里餘りも出でし時、備前よりの飛脚横手を打つて、扱も忘れたり刀にくゝりながら、状箱を宿に置いて來た男磯の方を見て、それ〜持佛堂の脇にもたし掛けて置きましたとどやきける、それが爰から聞ゆるものか、ありさまにきん玉があるかと、船中聲々にわめけば、此男念を入れてさぐり、いかにも〜二ツござりますといふ、何れも大笑になつて、何事もあれぢや物、舟を戻してやりやれとて、掛取直し港に入ば、けふの首途あしやと皆々履立して、やう〜舟汀に着きければ、姫路より追手の者爰かしこに立ち騒ぎ、もし此舟にありやと入改めけるに、お夏清十郎隠れかね、悲しやといふ聲ばかり、哀れ知らず



は、お夏に盗み出させ、清十郎取りて逃げしと云ひ觸れて、折ふし悪しく、此事ことわり立ちかね、哀れや廿五の四月十八日に其身を喪ひける、さてもはかなき世の中と、見し人袖は村雨の夕暮をあらそひ、惜み悲まぬはなし、其後六月の初め萬の蟲干せしに、かの七百兩金置所替りて、車長持より出でけるとや、物に念を入るべき事と子細らしき親仁の申しき

## 命のうちの七百兩のかね

何事も知らぬが佛、お夏清十郎がはかなくなりしとは知らず、とやかく物思ふ折ふし、里の童子の袖引連れて、清十郎殺さばお夏も殺せと唄ひける、聞けば心に懸りてお夏をだてし姥に尋ねければ、返事しかねて涙をこぼす、さてはと狂亂になつて、生きて思ひをさしようよりもと、子供の中に交はり音頭とつて唄ひける、皆々是を悲しく、さまざまとめても止み難く、間もなく涙雨降りて、向ひ通るは

清十郎でないか、笠がよく似た管笠が、やはんはんのけらく／＼笑ひ、うるはしき姿いつとなく取亂して狂ひ出でける、ある時は山里に行き暮れて草の枕に夢を結べば、其まゝに次々の女も自友亂れて、後は皆々亂人となりにけり、清十郎年ごろ語りし人ども、せめては其跡残し置けとて、草芥を染めし血をすすぎ、屍を埋みてしるしに松柏を植ゑて、清十郎塚といひ觸れし、世の哀は是ぞかし、お夏夜毎に此所へ來りて弔ひける、其うちにまざ／＼と昔の姿を見し事疑ひなし、それより日を重ね、百ヶ日にあたる時、塚の露草に座して守り脇指をぬきしを、やうやう引き止めて、只今むなしうなり給ひて用なし、實ならば髪をも下させ給ひ、末々亡き人をとひ給ふこそ菩提の道なれ、我々も出家の望みと言へば、お夏心をしづめ、皆々が心底察して、兎も角も何れもがさしづは漏れじと、正覺寺に入りて上人を頼み、十六の夏衣けふより墨染にして、朝に谷の下水を掬ひあげ、夕に峯の花を手折り、夏中は毎夜手燈かゝげて大經の勤め怠らず、有難き比丘尼とは



なりぬ、是を見る人殊勝さ増して、傳へ聞く中將姫の再來なるべしと、この庵室  
 に但馬屋も發心起りて、右の金子佛事供養して清十郎を弔ひけるとや、其頃は上  
 方の狂言になし、遠國村々里々迄二人が名を流しける、是ぞ戀の新川舟を造りて  
 思ひを乗せて泡の哀れなる世や

# 好色五人女

## 卷二

てんまに  
 情を入し樽屋物語

### 目録

一 戀に泣輪の井戸替

あひ釣瓶も思ひに亂るゝ繩有

二 踊はくづれ桶夜更けて化物

人は恐ろしや蓋して見せぬ心有

三 京の水漏らさぬ中忍て合釘

目印の錐紙に書付て有

四 こけらは胸の焼付新世帯

心正直の細工人天満に有

五 木屑の杉楊枝一寸先の命

りんき逆目をやる杉有

後正人女

二二

戀に泣輪の井戸替

身は限りあり、戀は盡せず、無常は我手細工の棺桶に覺え、世を渡る業とて、錐鋸のせはしく、鉋屑のけぶり短く難波のあしの屋を借りて、天満といふ所から住みなす男有り、女も同じ片里の者には優れて、耳の根白く足も土氣はなれて、十四の大晦日は親里の御年貢三分一銀に差詰りて、棟高き町家に腰元使ひして月日を重ねしに、自然と才覺に生れつき、御隠居への心遣ひ、奥様の氣をとる事、それより末々の人に迄悪しからず思はれ、其後は内藏の出し入れをも任され、此家におせんといふ女なうてはと、諸人に思ひつかれしは、其身賢き故ぞかし、され共情の道を辨へず、一生枕一つにてあたら夜を明しぬ、かりそめに戯ぶれ、袖つま引にも遠慮なく聲高にして、その男無首尾を悲み、後は此女に物言ふ人もなかりき、是をそしれど人たる人の小女は斯くありたき物なり、折ふしは秋の初めの

七日、織女に借小袖とて、未だ仕立てより一度も召しもせぬを、色々七ツめんどりばに重ね、梶の葉に有ふれたる歌を遊ばし祭り給へば、下々もそれ／＼に唐瓜枝柿かざる事のをかし、横町うら借屋迄籠役にかゝつて、お家主殿の井戸替けふ殊に珍らし、濁水大方かすりて真砂のあがるにまじり、日外見えぬとて人疑ひし薄刃も出、昆布に針さしたるもあらはれしが、是は何事にかいたしけるぞや、猶探し見るに、駒引銭、目鼻なしの裸人形、くだり手のかたし目貫、つぎ／＼の涎掛、さまざまの物こそあがれ、蓋なしの外井戸心もとなき事なり、次に涌水近く根輪の時、昔の合釘離れてつぶれければ、彼の樽屋を呼び寄て輪竹を新しくなしぬ、爰に流れ行くさざれ水をせきとめて、三輪組む姿の老女いける蟲を愛しけるを、樽屋何ぞと尋ねしに、是はたゞ今汲みあげし井守といへものなり、そなたは知らずや、此蟲竹の筒に籠めて煙となし、戀ふる人の黒髪にふりかければ、あなたより思ひ付事ぞと、さも有りのまゝに語ぬ、此女もとは夫婦池のこさんとして、



子おろしなりしが、此身すぎ世に改められて、今は其むごき事をやめて、素麴の碓など引て一口暮の命のうちに、寺町の入相の鐘も耳にうとく淺まし、賤しく身に覺えての因果、なほ行末の心ながら、恐ろしき事を咄けるに、それは一ツも聞もいれずして、井守を焼て戀のたよりになる事を深く問ふに、おのづと哀さも増りて、人には洩らさじ、其思ひ人はいかなる御方様ぞといへば、樽屋我を忘れてこがるゝ人は忘れず、口のあるに任せて、樽の底を叩きて語りしは、其君遠きにあらず、内方のお腰元おせんが、百度の文の返しもなきと涙に語れば、彼女うなづきて、それは井守もいらず、我堀川の橋かけて、この戀手に入れてまなく思ひを晴させんと、かりそめに請相ければ、樽屋驚き、時分がらの世の中、金銀の入る事ならば思ひながら成り難し、あらば何か惜かるべし、正月に木綿着物染様は好み次第、盆に奈良晒しの中位なるを一ツ、内證はこんな事で埒の明やうにと頼めば、それは慾にひかるゝ戀ぞかし、我頼まるゝは其分にはあらず、思ひつか

する仕かけに大事有り、此年月數千人の肝煎、つねにわけの悪しきといふ事なし、菊の節句より前に會はし申すべしといへば、樽屋いとゞかしもゆる胸に焼付、かゝ様一代の茶の薪は我等のつゞけまゐらすべしと、人は長生の知れぬ浮世に、戀路とて大分の事をうけあふはをかし

## 踊はくづれ桶夜更て化物

天満に七ツの化物有り、大鏡寺の前の傘火、神明の手なし兒、曾根崎の逆女、十一丁目の首しめ繩、川崎の泣坊主、池田町の笑ひ猫、鶯塚の燃から日、是皆年を重ねし狐狸の業ぞかし、世に恐ろしきは人間化て命をとれり、心は自の暗なれや、七月廿八日の夜更て軒端を照せし燈籠も影なく、けふあすばかりと名残に聲を枯しぬる馬鹿踊も、一人く己が家々に入りて、四辻の犬さへ夢を見し時、彼樽屋に頼まれし徒ら鼻、面屋門口の未だ明掛てありしを見合せ、戸ざしけはしく内に

駈込み、廣敷に伏まるび、やれ／＼すさまじや、水が呑みたいといふ聲、絶えて限りの様に見えしが、されども息の通ふを頼みにして呼生けるに、何の子細もなく正氣になりぬ、内儀隠居のかみさまを始めて、何事か目に見えてかくは恐れけるぞ、我事年寄のいはれざる夜ありきながら、宵より寝ても目のあはぬあまりに、踊を見に参りしほどに、鍋島殿屋敷の前に京の音頭道念仁兵衛が口うつし、山くどき、松盡し、暫く耳にあかず、數多の男の中を押し分け、團扇かざして詠めけるに、闇にても人はかしく、老いたる姿をかづかず、白き帷子に黒き帯の結目を當風にあちはやれども、かりそめに我尻つめる人もなく、女は若きうちの物ぞと、少しは昔のおもはれ、口惜くてかへるに、此門近くなりて、年の程二十四五の美男我にとりつき、戀にせめられ今思ひ死、ひとへ二日を浮世の限り、腰元のおせんつれなし、此執心外へは行くまじ、此家内を七日が中に一人も残さず、取殺さんといふ聲の下より、鼻高く面赤く眼光り、住吉の御祓の先へ渡り、形の如

くそれに魂とられ、只物すごく内方へかけ入るの由語れば、何れも驚く中に、隠居涙を流し給ひ、戀忍ぶ事世になきならひにはあらず、せんも縁付頃なれば、其男身すぎを辨へ、博奕後家狂ひもせず、たまかならば取らすべきに、いかなる者とも知れず、其男ふびんやと、しばし物いふ人もなし、此噂が仕掛、さても／＼戀にうとからず、夜半になりて各々に手を引かれ小家に戻り、此上の首尾を企むうちに、東窓よりあかりさし、隣に火打石の音、赤子泣出し、紙帳もりて夜もすがら喰れし蚊をうらみて追拂ひ、二布の蚤取る片手に、佛棚よりはした錢を取出し、つまみ菜買など、物のせはしき世渡りの中にも、夫婦のかたらひを樂み、南枕に寝蒔しどけなくなりしは、すぎつる夜甲子をも構はず何事をかし侍る、やうやう朝日耀き、秋の風身にはしまざる程吹きしに、鼻は鉢巻して枕重げにもてなし、岡島道齋といへるを頼み、藥代の當所もなく、手づから藥罐にてかしらせんじのあがる時、おせん裏道より見舞ひ來て、お氣合はいかゞとやさしく尋ね、左

の袂より奈良漬瓜を片舟、蓮の葉に包みて、たばね薪の上に置き、醬油のたまりを參らせばと言ひ捨て歸るを、鼻引き止めて、我ははやそなたゆゑに思ひよらざる命を捨つるなり、自娘とても持たざれば、なき跡にて弔ひても給はれと、ふるき苧桶の底より紅の織紐付し紫の革たび一足、つぎ／＼の珠數袋、此中にさられた時の暇の状ありしを、是はとつて捨て、此二色をおせんに形見とてわたせば、女心の儂なく、是を誠と泣出し、我に心有人さもあらば、何とて其道しるゝこなた様を頼みたまはぬぞ、おもはく知らせ給はゞ、それを徒らにはなさじと云ふ、鼻よき折ふしと始めを語り、今は何をか隠すべし、かね／＼我を頼まれし其心ざしの深き事、哀とも不便とも又いふに足らず、此男を見捨て給はゞ、自が執着とても脇へはゆかじと、年頃の口上手にて言ひつゞけければ、おせんも自然と靡き心になりて、もだ／＼と上氣して、いつにても其御方に逢はせ給へといふに嬉しく、約束を固め、一段の出合所を分別せしと小語て、八月十一日立に拔參を此道

終ちぎりをこめ、行末迄互にいとしさかはゆさの枕物語、しみ／＼と悪かるまじき、而も男振じやと、思ひつくやうに申せば、おせんも逢はぬさきより其男をこがれ、物も書きやりますか、頭ば後さがりて御座るか、職人ならば腰はかゞみませぬか、爰出た日は守口か牧方に晝から泊りまして、蒲團を借りて早う寝ましよと、取まぜて談合するうちに、中居の久米が聲して、おせんどのお呼びなされますと云へば、いよ／＼十一日の事と申残して歸りける

京の水もらさぬ中忍びてあひ釘

朝貌のさかり、朝詠めは一入涼しさもと、宵より奥様の仰せられて、家居離れし裏の垣根に、腰掛を列べ、花氈しかせ、重菓子入に焼飯、そぎ楊枝、茶瓶わするな、明六ツの少し前に行水をするぞ、髪はついでみつをりに、帷子は廣袖に、桃色の裏付を取出せ、帯は鼠緇子に丸づくし、飛紋の白き二幅物、萬に心をつくるは、

隣町より人も見るなれば、下々にもつぎの當らぬ帷子を着せよ、天神橋の妹が方へは、つねの起時に乗物迎ひに遣はせよと、何事をもせんに任せられ、ゆたかなる蚊帳に入り給へば、四ツの角の玉の鈴音なして寢入給ふまで、番手に團の風靜なり、我家の裏なる草花見るさへかくやうだいなり、惣じて世間の女のうはかぶきなることはにかぎらず、亭主は猶奢りて島原の野風、新町の萩野、此二人を毎日荷ひ買して、津村の御堂まゐりとてかたぎぬは持せ出しが、直に朝ごみに行くよし見えける、八月十一日の曙まへに彼横町のかゝが板戸をひそかに叩き、せんで御座るといひもあへず、そこ／＼にからげたる風呂敷包一ツ投げ入れて歸る、物の取落しも心得なく、火をともして見れば、壹匁つなぎの錢五ツ、こま銀十八匁もあらうか、白突三升五合ほど、鯉節一ツ、守袋に二ツ櫛、染分のかゝへ帯、銀煤竹の裕、扇流しの中なれるゆかた、裏ときかけたる木綿たび、わらんぢの緒もしどけなく、加賀笠に天滿堀川と、無用の書付と、よごれぬやうに墨をおと

す時、門の戸を音信、かゝさま先へまゐると、男の聲して言ひ捨て行く、其後せんが身を震はして、内かたの首尾は只今と言へば、嗅は風呂敷を提て、人しれぬ道を走り過ぎ、我も大儀なれ共神の事なれば伊勢迄見届てやらうと言へば、せんいやな顔して、年よられて長の道思へば／＼及び難し、其人に我を引合せ、兎角伏見から夜船で下り給へと、早まき心になりて氣のせくまゝ急ぎ行くに、京橋を渡りかゝる時、傍輩の久七、今朝の御番替りを見に罷しが、是はと見付られしは是非もなき戀の邪魔也、某も常々御參宮心掛しに、願ふ所の道連、荷物是我等持つべし、幸ひ遺銀は有合す、不自由なるめは見せまじとしたしく申すは、久七もおせんに下心あるゆゑぞかし、嗅氣色をかへて、女に男の同道、さりとは／＼人の見てもよもや只とは言はじ、殊更此神はさやうの事を堅く嫌ひ給へば、世に耻さらせし人、見及び聞き傳へしなり、平に／＼まゐり給ふなと言へば、是は思ひもよらぬ事を改めらるゝ、更におせん殿に心かくるにはあらず、只信心の思ひ

立、それ戀は祈らずとも神の守給ひ、心だに誠の道連に叶ひなば、日月の哀れみ、おせん様の情次第に、何國迄もまゐりて、下向には京へ寄て、四五日も慰め、折ふし高尾の紅葉、嵯峨の松茸の盛り、川原町に旦那の定宿あれども、そこは萬むつかし、三條の西詰にちんまりとした座敷を借りて、おかゝ殿は六條参りをさせまじよと、我物にして行くは久七がはまり也、やう／＼秋の日も山崎に傾き淀堤の松蔭半行きしに、色作りたる男の人待ち貌にて丸葉の柳の根に腰を掛けしを、近くなりて見れば申し交せし樽屋也、不首尾を目交して、跡や先になりて行くこそ案の外なれ、嗚は樽屋に言葉を掛け、こなたも伊勢参りと見えまして然も一人、氣立もよき人と見ました、此方と一所の宿にと申せば、樽屋悦び、旅は人情とかや申せし、萬事頼みますと言へば、久七中々合點の行かぬ貌して、行方も知れぬ人を、殊に女中の連には思ひ寄らずと云ふ、嗚情らしき聲して、神は見通し、おせん殿にはこなたといふ兵あり、何事か有るべしと、かしま立の日より同

じ宿に泊り、おもはく語らずすきを見るに、久七氣をつけ、間の戸障子一つに外し、水風呂に入りても首出して覗き、日暮れて夢結ぶにも、四人同じ枕を列べし、久七寝ながら手をさしのばし、行燈の土器傾け、やがて消ゆるやうにすれば、樽屋は枕に近き窓蓋をつきあげ、秋も此暑さはと言へば、折ふし晴れ渡る月四人の寝姿をあらはす、おせん空齋を出せば、久七右の足をもたす、樽屋是を見て扇子拍子をととりて、戀は曲者皆人のと曾我の道行を語り出す、おせんは目覺して嗚に寝物語、世に女の子を産む程恐ろしきはなし、常々おもふに、年の明き次第北野の不動堂のお弟子になりて、末々は出家の望みと申せば、嗚現のやうに聞てそれがまし、思ふやうに物のならぬ浮世にと、前後を見れば宵に西枕の久七は南頭に、揮ときてゐるは、物参りの旅ながら不用心なり、樽屋は蛤貝に丁子の油を入れ、小杉のはな紙に持添え、無念なる貌つきをかし、夜の内は互に戀に關を据ゑ、明の日は相坂山より大津馬を借りて、三寶荒神に、男女の一つに乗るを、脇から



見てはをかしけれども、身の草臥、或は思ひ入れば、人の見しも世間も辨なし、おせんを中に乗せて、樽屋久七兩脇に乗りながら、久七おせんが足の指先を握れば、樽屋は脇腹に手をさし、忍び／＼たはぶれ、其心の程をかし、何れも御参宮の心ざしにあらねば、内宮二見へも掛けず、外宮ばかりへちよつと参りて、しるし計りにお被ひ串若和布を調へ、道中兩方白眼あひて、何の子細もなく京迄下向して、久七が才覺の宿に着けば、樽屋は取替し物共目のこ算用にして、此程は何分御やつかいに成りましてと一禮言ふて別れぬ、久七今は我物にして、それ／＼の土産物を見出して買うて遣りける、日の暮も待ち久しく、烏丸の邊へ近しき人宥て見舞ひしうちに、鼻はおせんをつれて清水様へ参るのよし、取急ぎ宿を出て行きしが、祇園町の仕出し辨當屋の釣簾に、付紙目印に錐と鋸を書き置きしが、此内へおせん入るかと思えしが、中二階に上れば樽屋出合ひ、末々約束の盃事して、其後鼻は箱階子ありて、爰はさて／＼水がよいとて、煎じ茶はてしもなく吞

みにける、是を契の始にして、樽屋は晝船に大坂に下りぬ、鼻おせんは宿に歸りて、俄に今から下ると言へば、是非二三日は都見物と久七とゞめけれ共、いやいや奥様に男狂ひなどしたと思はれましてはいかゞと、出て行く、風呂敷包は大儀ながら久七殿頼むと言へば、肩が痛むとて持たず、大佛稻荷の前、藤の森に休みし茶の錢も、銘々拂ひにして下りける

こけらは胸の焼付さら世帯

参るならばまゐると内へ知らして参らば、通し駕籠か乗掛でまゐらすに、物好きな拔参りして、此土産物はどこの錢で買うたぞ、夫婦連だちても、その／＼そんな事はせぬぞ、やうも／＼二人連で下向した事じや迄、久七やせんが酒迎ひに寝所をしてとらせ、あれは女の事じやが久七がすゝめて、智恵ない神に男心を知らすといふ物じやと、お内儀様の御腹立、久七が申し譯一ツも埒あかず、罪なうし

て疑はれ、九月五日の出替を待たず御暇申して、其後は北濱の備前屋といふ上問屋に季を重ね、八橋の長と言へる蓮葉女を女房にして、今見れば柳小路にて鮮屋をして世を暮し、せんが事つゝ忘れける、人は皆移り氣なる物ぞかし、せんは別の事なく奉公をせしうちにも、樽屋が假の情を忘れかね、心も空にうか／＼となりて、晝夜の辨もなく、自身を捨て、女に定まつてのたしなみをもせず、其様いやしげに成て、次第／＼やつれける、かゝる折ふし鶏とぼけて宵鳴すれば、大釜自然とくさりて底をぬかし、突込し朝夕の味噌風味變り、神鳴内藏の軒端に落ちかゝり、よからぬ事打ちつゞきし、是皆自然の道理なるに、此事氣に懸けられし折から、誰が言ふとなくせんをこがるゝ男の執心、今に止む事なく、其人は樽屋なるはと申せば、親方傳へ聞いて、何卒して其男にせんをもらはさんと、横町の鼻を呼びよせ内談有りしに、常々せん申せしは、男持つ共職人はいやと言はれければ、心もとなしと申せば、それは要らざる物好み、何によらず世をさへ渡らば

勝手づくくと、さまざま異見して樽屋へ申し遣はし、縁の約束極め、程なくせんに脇ふさがせ、かねを付させ、吉日をあらためられ、二番の木地長持一つ、伏見三寸の葛籠一荷、糊地の挾箱一ツ、奥様着おろしの小袖二ツ、夜着蒲團、赤ね縁の蚊屋、昔染のかづき取り集めて物數廿三、銀二百目付て送られけるに、相生よく仕合よく、夫は正直の頭を傾け細工をすれば、女はふしかね染の縞を織り習ひ、明けくれかせぎける程に、盆前大晦日にも内を出違ふ程にもあらず、大方に世を渡りけるが、殊更男を大事に掛け、雪の日風の立つ時は食つぎを包み置き、夏は枕に扇を離さず、留守には宵から門口をかため、夢々外の人には目を遣らず、物を二ツ言へばこちのお人／＼と嬉しがり、年月積りてよき中に、二人迄産れて、猶々男の事を忘れざりき、されば一切の女移り氣なる物にして、うまさ色咄しに現をぬかし、道頓堀の作り狂言をまことに見なし、いつとなく心を亂し、天王寺の櫻の散前、藤の棚の盛り、麗しき男にうかれ、かへりては一代やしなふ男を

嫌ひぬ、是程無理なる事なし、それより萬の始末心を捨て、大焼する竈を見ず、鹽が水になるやら、いらぬ所に油火をとすも構はず、身體うすくなりて暇の明くを待ちかねける、かやうの語らひ、さりとはく／＼恐ろし、死別れては七日も立たぬに後夫をもとめ、去られては五度七度の縁づき、さりとは口惜しき下々の心底なり、上々には假にもなき事ぞかし、女の一生に一人の男に身をまかせ、さはりあれば御若年にして河洲の道明寺、南都の法華寺にて出家を遂げらるゝ事も有りしに、何ぞ隠し男をする女、浮世にあまたあれ共、男の名の立つ事を悲み、沙汰なしに里へ歸し、或は見付てさもしくも金銀の慾にふけて扱にして濟まし、手ぬるく命を助くるが故に、此事の止み難し、世に神有り報いあり、隠しても知るべし、人恐るべき此道なり

木屑の杉やうじ一寸先の命

來る十六日に無業の御齋申し上たく候、御來駕においては忝なく奉存候、町衆次第不同、麴屋長左衛門、世の中の年月の立つ事夢まぼろし、早過ぎゆかれし親仁五十年忌になりぬ、我ながらへて是迄弔ふ事嬉し、古人の申し傳へしは、五十年忌になれば、朝は精進して暮は魚類になして、謠酒盛、其後は問はぬ事と申せし、是がおさめなれば少し物入も厭はず、萬事その用意すれば、近所の出入の噂ども集まり、椀家具壺平るすちやつ迄取さばき、手毎に拭きて膳棚に重ねける、爰に樽屋が女房も日頃御念比なれば、御勝手にて働く事も御見廻申しけるに、兼て才覺らしく見えければ、そなたは納戸にありし菓子品々を椽高へ組付てと申せば、手元見合、饅頭御所柿唐ぐるみ落雁榧杉やうじ、是をあらましに取合時、亭主の長左衛門棚より入子鉢をおろすとて、おせんが頭に取落し、麗しき髪かみの結目忽ち解けて、あるじ是を悲めば、少しも苦しからぬ御事と申して、かい角ぐりて臺所へ出でけるを、麴屋の内儀見咎めて氣を廻し、そなたの髪は今の前迄美しく

有りしが、納戸にて俄に解けしはいかなる事ぞと言はれし、おせん身に覺えなく、物靜に旦那殿棚より道具を取り落し給ひ、かくは成りけるとあり様に申せど、是を更に合點せず、さては晝も棚から入子鉢の落つる事も有るよ、徒らなる七ツ鉢め、枕せずにははしく寝れば髪はほどくる物じや、よい年をして親の弔ひの中にする事こそあれと、人の氣盡して盛形さしみを投げこぼし、酔にあて粉にあて、一日この事言ひ止まず、後は人も聞き耳立て、興覺めぬ、かゝる悋氣の深き女を持合すこそ其男の身にして因果なれ、おせん迷惑ながら聞き暮せしが、思へば思へば悪き心中、とても濡れたる袂なれば、此上は是非に及ばずあの長左衛門殿に情を掛け、あんな女に鼻あかせんと思ひそめしより、各別の心ざし程なく戀となり、忍びくりに申し交し、いつぞの首尾を待ちける、貞享二とせ正月廿二日の夜、戀は引手の寶引繩、女子の春なぐさみふけゆくまで取亂れて、負退にするも有り、勝に飽かず遊ぶもあり、我しらず扇を出すもありて、檜屋も燈火消えかゝり、男



は晝ひるのくたびれに鼻はなをつまむも知らず、おせんが歸るにつけ込み、内々約束今と言はれて、いやが成らず、内に引き入れ、後あとにも前まへにも是が戀の始め、○○○○○  
 ○○○○○○  
 ○○樽屋は目を開あき、あはゞのがさぬと聲こゑを掛かければ、よるの衣えを脱すぎ捨て、丸裸はだかにて心玉飛たまこぎが如く、遙はるかなる藤ふせの棚たなに紫のゆかりの人有ひとりければ、命いのちからくにて逃げのびける、おせん叶はじと覺悟かくごのまへ、匏かんなにして心もとをさし通とほし敢果あきらなく成りぬ、其後そのちなきがらも徒ただら男も、同じ科野とがのに耻はぢを晒さらしぬ、其名そのなさまざまの作り歌うたに、遠國あんこく迄までも傳つたへける、悪わるしき事はのがれず、あな恐おそろしの世よ

# 好色五人女

## 卷三

みやこに  
こよみ  
中段に見る曆屋物語

### 目録

一 姿すがたの關せき守もり

京の四條よじいきた花見はなみ有

二 してやられた枕まくらの夢ゆめ

灸やいとするより思おもひに燃も有

三人をはめたる湖

死もせぬ形見の衣装有

四 小判知らぬ休み茶屋

都に見し土人形有

五 身のうへの立聞

夜の編笠子細もの有

姿の關守

姿の關守

天和二年の曆、正月一日吉書萬によし、二日姫始め、神代の昔より此事戀知鳥の教へ、男女の徒らやむ事なし、爰に大經師の美婦とて浮名の立ちつゞき、都に情の山を動かし、祇園會の月峰桂の眉をあらそひ、姿は清水の初櫻未だ咲きかゝる風情、唇の麗しきは高尾の木末色の盛と詠めし、すみ所は室町通、仕出し衣裳の物好み當世女の只中、廣い京にも又有るべからず、人の心も浮き立つ春深くなりて、安井の藤今を紫の雲の如く、松さへ色を失ひ、たそがれの人立、東山に又姿の山を見せける、折ふし洛中に隠れなき騒ぎ中間の男四天王、風義人に優れて目立ち、親より譲りの有るに任せ、元日より大晦日迄一日も色に遊ばぬ事なし、さのふは島原にもろこし、花崎、薫、高橋に明し、けふは四條川原の竹中吉三郎、唐松歌仙、藤河吉三郎、光瀬左近など愛して、衆道女道を晝夜のわかちもなく、

さま／＼遊興つきて、芝居過より松屋といへる水茶屋に居流れ、けふ程見よき地  
女の出し事もなし、もしも我等が目に見しもある事もやと、役者の賢き  
やつを目利頭に、花見歸りを待つ暮々、是ぞ替りたる慰なり、大方は女中乗物見  
ぬが心にくし、亂れありきの一群いやなるもなし、是ぞと思ふもなし、兎角はよ  
ろしき女斗り書きとめよと、硯紙とりよせてそれを移しけるに、年の程三十四五  
と見えて、首筋立ちのび、目の張凜として額の生へ際自然とうるはしく、鼻思ふ  
には少し高けれども、それも堪忍頃なり、下に白ぬめのひつかへし、中に淺黄ぬ  
めのひつかへし、上に樺ぬめのひつかへし、本繪に書かせて、左の袖に吉田の法  
師が面影、ひとり燈のもとに古き文など見ての文段、さりとは子細らしき物好み、  
帯は敷瓦の折びろうど、御所かづきの取りまはし、薄色の絹足袋、三筋緒の雪踏、  
音もせずありきて、わざとならぬ腰のすわり、あの男めが果報と見る時、何かし  
だ／＼へ物を言ふとて口をあきしに、下齒一枚ぬけしに戀を醒しぬ、問もなう其

跡より十五、六七には成るまじき娘、母親と見えて左の方に付、右のかたに墨衣  
着たる比丘尼の付て、下女あまた六尺供をかため、大事に掛くる風情、さては縁  
付前かと思ひしに、かね付て眉なし、貌は丸くして見よく、目に利發顯れ、耳の  
付やうしほらしく、手足の指ゆたかに、皮薄に色白く、衣類の衣こなし又有るべ  
からず、下に黄むく、中に紫の地なし鹿子、上は鼠じゆすに百羽雀のきりつけ、  
段染の一幅帯、むねあけ掛て身振よく、塗笠にとら打て千筋ごよりの緒を付け、  
見込のやさしさ、是一度見しに、脇貌に横に七分あまりのうち疵あり、更に生れ  
付とは思はれず、さぞ其時の抱姥を怨むべしと、皆々笑うて通しける、さて又二  
十一二なる女の本綿の手織縞を着て、其裏さへつぎ／＼を風ふきかへされ耻をあ  
らはしぬ、帯は羽織のおとしと見えて物哀に細く、紫の皮たび有るに任せて履き、  
かたし／＼の奈良草履、古き置綿して髪はいつ櫛の齒を入れしや、しどもなく亂  
れしを、ついそこ／＼にからげて、身に様子もつけず、獨たのみて行くを見るに、

面道具一つも不足なく、世にかゝる生れ付の又有る物かと、何れも見とれて、あの女によき物を着せて見ば、人の命を取るべし、まゝならぬは貧福と哀に痛まし、其女の歸るに忍びて人をつけゝる、誓願寺通の末なる煙草切の女と言へり、聞くに胸痛く煙の種ぞかし、其跡に廿七八の女、さりとは花車に仕出し、三ツ重ねたる小袖、皆黒羽二重に裾取の紅裏、金のかくし紋、帯は唐織寄縞の大幅前に結びて、髪は投げ島田に平元結懸けて、對のさし櫛、はきかけの置手拭、吉彌笠に四ツがはりのくけ紐を付て、顔自慢にあさくかづき、ぬきあし中びねりのありき姿、是々是じや、だまれとおのく近づくを待ち見るに、三人連れし下女共にひとりく、三人の子を抱せける、さては年子と見えてをかし、跡からかゝさまかゝさまといふを聞かぬ振して行く、あの身にしては我子ながらさぞうたてかるべし、人の風俗も生まぬうちが花ぞと、其女無常のおこる程とやきて笑ひける、またゆたかに乗物つらせて、女いまだ十三か四か、髪すき流し、先を少し折戻し、

紅の絹たゝみて結び、前髪若衆のすなるやうにわけさせ、金元結にて結せ、五分櫛の清なるさし掛、まづは美しさ、一つくゝいふ迄もなし、白繻子に墨形の肌着、上は玉蟲色のしゆすに、孔雀の切付見えすくやうに、其上に唐糸の網を掛け、さてもたくみし小袖に、十二色のたゝみ帯、素足に紙緒の履物、うき世笠跡より持たせて、藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためといはぬばかりの風儀、今朝から見盡せし美女ども、是にけあされて其名ゆかしく尋ねけるに、室町のさる息女今小町と云ひ捨て、行く、花の色は是にこそあれ、徒ら者とは後に思ひ合せ侍る

## してやられた枕の夢

男世帯も氣散じなる物ながら、お内儀のなき夕暮一しほ淋しかりき、爰に大經師の何がし年久しくやもめ住せられける、都なれや物好の女もあるに、品形すぐれ



てよきを望めば、心に叶ひがたし、詫ぬれば身を浮草のゆかり尋ねて、今小町といへる娘ゆかしく見に罷りけるに、過ぎし春四條に關居ゑて見咎めし中にも、藤をかざして覺束なきさましたる人、是どとこがれてなんのかのなしに縁組を取急ぐこそをかしけれ、其頃下立賣烏丸上ル町に、しやべりのなるとて隠れもなき仲人が有り、是を深く頼み樽の拵へ願ひ首尾して、吉日を擇びておさんを迎へける、花の夕月の曙、此男外を詠めもやらずして、夫婦の語らひ深く、三とせが程も重ねけるに、明暮世を渡る女の業を大事に、手づからべんがら糸に氣をつくし、末々の女に手紬を織らせて、わが男の見よげに始末を本とし、寵も大きくべさせず、小遣帳を筆まめにあらため、町人の家に有りたきはかやうの女ぞかし、次第に榮えて嬉しさ限りもなかりしに、此男東の方に行く事有りて、京に名残は惜めど身過ぎ程悲しきはなし、思ひ立つ旅衣、室町の親里に罷りてあらましを語りしに、我娘の留主中を思ひ遣りて、萬に賢き人もがな跡を預けて表むきを捌かせ、内證



はおさんが心助けにもなるべしと、何國もあれ親の慈悲心より思ひつけて、年を重ねてめし使ひける茂右衛門といへる若き者を聲の方へ遣はしける、此男の正直頭は人任せ、額小さく袖口五寸に足らず、髪置して此方編笠をかぶらず、ましてや脇差を拵へず、只十靈盤を枕に、夢にも銀儲のせんさくばかりに明しぬ、折節秋も夜嵐いたく冬の事思ひ遣りて、身の養生の爲めとて茂右衛門灸を思ひ立ちけるに、腰元のりん手軽くすゆる事をえたれば、是を頼みて艾數捻りて、りんが鏡臺に縞の木綿蒲團を折りかけ、初め一ツ二ツはこらへかねて、お姥から中居から竹迄も其あたりを押へて、貌しかむるを笑ひし、跡程煙強くなりて、鹽灸を待ち兼しに、自然と据ゑ落して、背骨つたひて身の皮ちぢみ、苦しき事暫なれども据手の迷惑さを思ひやりて、目を塞ぎ、齒を喰ひしめ堪忍せしを、りん悲しくもみ消して、是より肌をさすりそめて、いつとなくいとしゃとばかり思ひ込み、人しれず心地なやみけるを、後は沙汰しておさんさまの御耳にいれど、猶やめ難くな

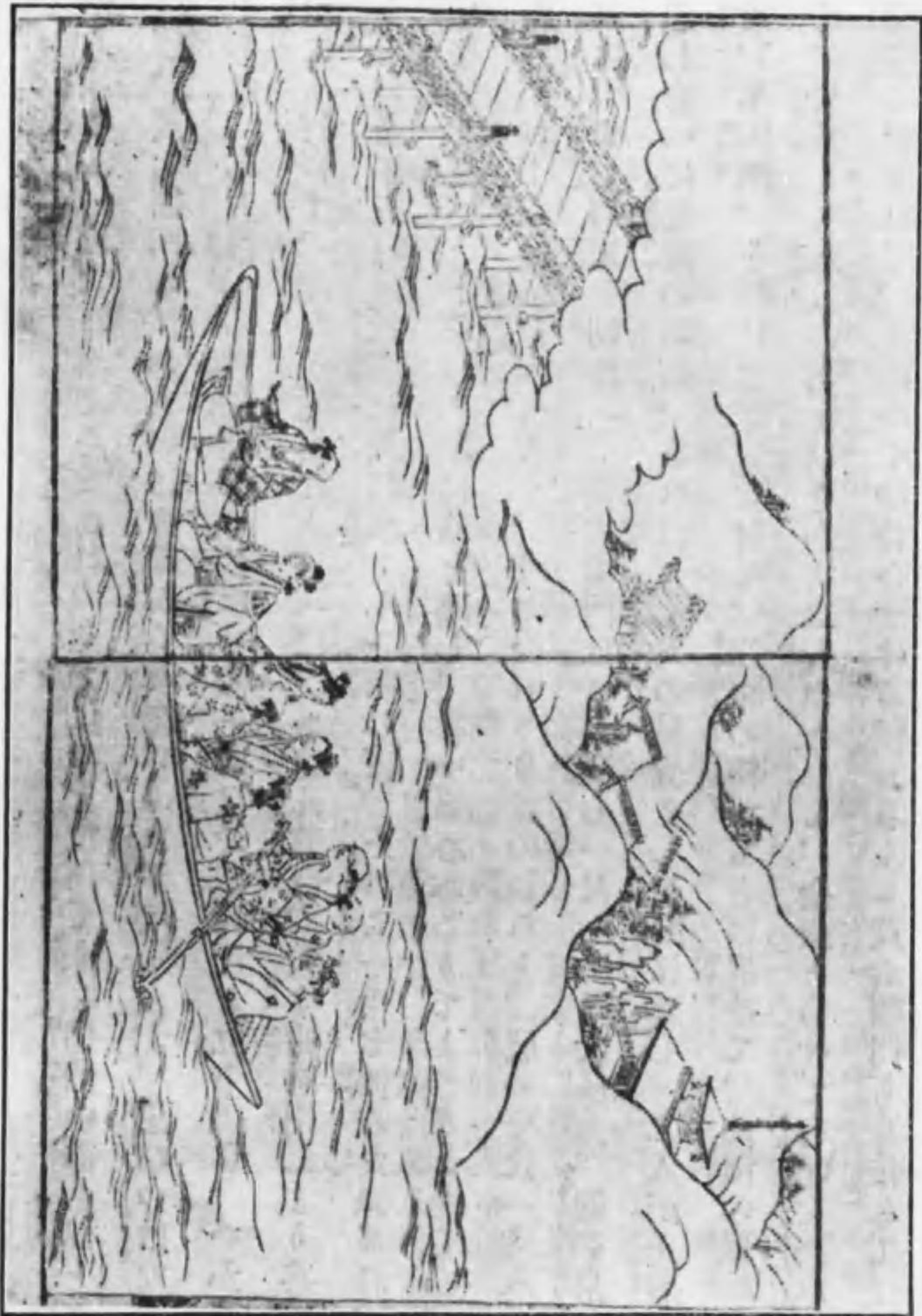
りぬ、りんいやしかるそだちにして、物書く事に疎く、筆のたよりを嘆き、久七が心覚えほどにじり書を羨ましく、ひそかに是を頼めば、茂右衛門よりは先へ、戀を我物にしたがるこそうたてけれ、是非なく日數ふる時雨も偽のはじめごろ、おさん様江戸へ遣はされける御狀の次手に、りんが痴話文書きて取らせんと、さら／＼と筆をあゆませ、茂のじ様まゐる身よりとばかり、引結びてかいやり玉ひしを、りん嬉しく、いつぞの時を見合せけるに、店より煙草の火よと言へ共、折から庭に人のなき事を幸に、其事にかこつけ、彼文を我事我と遣はしける、茂右衛門もながな事はおさん様の手とも知らず、りんをやさしきとばかりに面白をかしきかへり事をして又渡しける、是を讀みかねて御機嫌よろしき折ふし、奥様に見せ奉れば、思召よりて思ひもよらぬ御傳へ、此方も若いものゝ事なれば、いやでもあらず候へども、契重なり候へば、取あげば、がむつかしく候、去ながら着物羽織風呂銭身だしなみの事共を、共方から賃を御書きなされ候は、いやながら

協へてもやるべしと、うちつけたる文章、去迎はにくさもにくし、世界に男の日照はあるまじ、りんも大方なる生れ付、茂右衛門め程成る男を、そもや持ちかねる事や有ると、重ねて又文にしてなげき、茂右衛門を引き靡けてはまらせんと、數々かき口説きて遣はされける程に、茂右衛門文づらより哀ふかくなりて、始めの程嘲りし事のくやし、そめ／＼と返事をして、五月十四日の夜は定まつて影待遊ばしける、必ず其折を得てあひ見る約束いひ越ければ、おさん様何れも女房まじりに聲のある程は笑ひて、とてももの事に其夜の慰にも成りぬべしと、おさん様、りんに成替らせられ、身を木綿なる單物にやつし、りん不斷の寢所に曉方迄待ち給へるに、いつとなく心よく御夢を結び給へり、下々の女どもおさん様の御聲立てさせらるゝ時、皆々かけつくる契約にして、手毎に棒乳切木手燭の用意して、所々にありしが、宵よりのさわぎに草臥て、我知らず甕をかきける、七ツの鐘なりて後、茂右衛門下帯をとさかけ、闇がりに忍び、夜着の下にこがれて裸

身をさし込み、心のせくまゝに言葉交しける迄もなく、よき事をしすまして、袖の移香しほらしやと、又寢道具を引き着せ、さし足して立退き、さてもござかしき浮世や、まだ今やなどりんが男心はあるまじきと思ひしに、我さきにいかなる人か物せし事どとおそろしく、重ねてはいかな／＼思ひとまるに極めし、其後おさんはおのづから夢覺めて、驚かれしかば、枕はづれてしどけなく、帯はほどけて手元になく、鼻紙はわけもなき事に、心耻かしく成りて、よもや此事人に知れざる事あらじ、此上は身を捨て命限りに名を立て、茂右衛門と死出の旅路の道連と、猶やめ難く、心底申聞かせければ、茂右衛門思ひの外なるおもはく違ひ、乗りかゝつたる馬はあれど、君を思へば夜毎にかよひ、人の咎めも願ず、外なる事に身をやつしけるは、追付生死の二ツ物掛、是ぞあぶなし

人をはめたる湖

世にわりなきは情の道と、源氏にも書き残せし、爰に石山寺の開帳とて都人袖を  
 つらね、東山の櫻は捨物になして、行くも歸るも是や此關越えて見しに、大方は  
 今風の女出立、どれがひとり後世わきまへて參詣けるとはみえざりき、皆衣裳靴  
 べの姿自慢、此心ざし観音様もをかしかるべし、其頃おさんも茂右衛門つれて御  
 寺にまわり、花は命にたとへていつ散るべきも定めがたし、此浦山を又見る事の  
 知れざれば、けふの思ひ出にと、勢田より手ぐり舟を借りて、長橋の頼をかけて  
 も、短きは我々がたのしびと、浪は枕の床の山、あらはるゝまでの亂髪、物おも  
 ひせし貌げせを、鏡の山も曇る世に、鯛の御崎の逃れがたく、堅田の舟よばひも、  
 若やは京よりの追手かと、心玉もしづみて、ながらへて長柄山、我年の程も爰に  
 たとへて、都の富士、廿にも足らずして頓て消ゆべき雪ならばと、幾度袖をぬら  
 し、志賀の都はむかし語と、我もなるべき身の果ぞと、一しほに悲しく、龍燈の  
 あがる時、白髭の宮所に着きて神祈るにぞ、いとゞ身の上はかなし、兎角世にな



がらへる程つれなき事こそまされ、此湖に身を投げて永く佛國の語らひと言ひければ、茂右衛門も惜からぬは命ながら、死でのさは知らず、思ひつけたる事こそあれ、二人都への書置残し、入水せしと言はせて此所を立ちのき、いかなる國里にも行きて、年月を送らんと言へば、おさん喜び、我も宿を出しより其心掛ありと、金子五百兩挾箱に入れ來りしと語れば、それこそ世を渡るたねなれ、いよいよ爰を忍べと、それ／＼に筆を残し、我々悪心おこりてよしなき語らひ、是天命のがれず、身の置所もなく、今日今日うき世の別れと、肌守に一寸八分の如來に、黒髪の末を切添へ、茂右衛門はさし馴し一尺七寸の大脇差、關和泉守銅ざしらへに卷龍の鐵鍔、それはよく人の見覚えしを跡に残し、二人が上着、女草履、男雪踏、それにまで氣を付て、岸根の柳がもとに置捨て、此濱の獵師調練して、岩飛とて水入の男をひそかに二人やとひて、金銀とらせて有増を語れば、心やすく頼まれて、ふけゆく時待合せける、おさんも茂右衛門も身拵して、借家の

笹戸明掛け、皆々をゆすり起して、思ふ子細のあつて、只今最後なるぞとかけ出し、あらけき岩の上にして念佛の聲幽に聞えしが、二人ともに身をなげ給ふ水に音あり、いづれも泣き騒ぐうちに、茂右衛門おさんを肩にかけて、山木わけて木ぶかき杉村に立のけば、水練は浪の下へくゞりて、思ひもよらぬ汀に上りける、つき／＼の者共手を打つて是を歎き、浦人を頼み、さまざま探して甲斐なく、夜も明行けば、泪に形見色々巻込み、京都に歸り此事を語れば、人々世間を思ひやりて、外へ知らさぬ内談すれども、耳せはしき世の中、此沙汰募りて春慰にいひやむ事なくて、是非もなきいたづらの身や

## 小判しらぬ休み茶屋

丹波越の身となりて、道なきかたの草分衣、茂右衛門おさんの手を引て、やうやう峯高く登りて跡恐ろしく、思へば生きながら死んだ分になるこそ心ながらうた

てけれ、猶行くさき柴人の足形も見えず、踏迷ふ身の哀も今女のはかなく辿りかねて、此苦しき息も限りと見えて、貌色替りて悲しく、岩もる雫を木の葉にそぎ、さまざま養生すれども、次第にたよりすくなく、脈も沈みて今に極まりける、薬にすべき物とともなく、命の終るを待ち居る時、耳ぢかく寄せて、今少し先へ行けばしるべある里近し、さもあらば此憂を忘れて思ひの儘に枕定めて語らん物をと歎けば、此事おさん耳に通じ、嬉しや命にかへての男じやものと氣を直しける、扱は魂に戀慕入代り、外なき其身痛ましく、又負ふて行く程に、僅なる里の垣根に着きけり、爰なん京への海道といへり、馬も行違ふ程の岨に道もありける、藁茸ける軒に杉折掛けて上々諸白あり、餅も幾日になりぬ、ほこりをかづきて白き色なし、片見世に茶筌土人形かぶり太鼓、すこしは目馴し都めきて、是に力を得、しばし休みて此嬉しさにあるじの老人に金子一兩とらしけるに、猫に傘見せたる如く、いやな貌つきして茶の錢置き給へといふ、さても京より此所十五里はな



りしに、小判見知らぬ里もあるよとをかしくなりぬ、それより栢原といふ所に行きて、久しく音信絶えて無事をも知らぬ娘の許へ尋ね入て昔を語れば、流石よしみとてむごからず、親の茂介殿の事のみ言ひ出して、泪片手夜すがら咄し、明れば麗しき女郎に不思議を立て、いかなる御方ぞと尋ね給ふに、是さしあたつての迷惑、此事までは分別もせずして、是は私の妹なるが、年久しく御所方に宮仕ひせしが、心地惱みて都の物がたき住居を嫌ひ、物静なるかゝる山家に似合の縁もがな、身をひきさげて里の仕業の庭働き望みにて伴ひ罷りける、敷銀も貳百兩ばかりたくはへありと、何心なく當座捌きに語りける、何國もあれ欲の世の中なれば、此娘是に思ひつき、それは幸の事こそあれ、我一子いまだ定まる妻ともなし、そなたものかぬ中なれば、是にと申掛られ、さても氣の毒まさりける、おさん忍びて泪を流し、此行末いかゞあるべしと物思ふ所へ、彼男夜更けて歸りし其様すさまじや、優れて丈高く、頭は唐獅子の如く縮み揚りて、髭は熊のまざれて、

眼赤筋立て光つよく、足手其まゝ松木にひとしく、身には割織を着て、藤繩の組帯して、鐵砲に切火繩、かますに兎狸を取入れ、是を渡世すと見えける、其名を聞けば岩飛の是太郎とて、此里にかくれもなき悪人、都衆と縁組の事を母親語りければ、むくつげなる男も是を悦び、善はいそぎ、今宵のうちにと、びん鏡取出して面を見るこそやさしけれ、母は盃の用意とて鹽目黒に口の缺たる酒徳利を取廻し、蕙屏風にて二枚敷ほどかこひて、木枕二ツ薄縁二枚、横島の蒲團一ツ、火鉢に割松もやして、此夕一しほに勇みける、おさん悲しさ、茂右衛門迷惑、かりそめの事を申し出して、是ぞ因果と思ひ定め此口惜さ、又も憂目に近江の海にて、死ぬべき命をながらへしとて、天われをのがさずと脇差取て立つを、おさん押し止めて、さりとは短し、さまざま分別こそあれ、夜明けて爰を立ちのくべし、萬事は我に任せ給へと氣をしづめて、其夜は心よく祝言の盃取かはし、我は世の人の嫌ひ給ふ、ひのえ午なると語れば、是太郎聞て、たとへばひのえ猫にても、ひ

のえ狼にても、それにはかまはず、それがしは好みて青どかけを喰ふてさへ死なぬ命、今年廿八迄蟲ばら一度起らず、茂右衛門殿も是にはあやかり給へ、女房共は上方そだちにして、物にやはらかなるが氣にはいらねども、親類のふしやうなりと、膝枕してゆたかに臥ける、悲しき中にもをかしくなつて寝入るを待ちかね、又爰を立ちのき、猶奥丹波に身をかくしける、やう／＼日數ふりて丹後路に入て、切戸の文珠堂に通夜してまどろみしに、夜半と思ふ時、あらたに靈夢あり、汝等世になき徒らして、何國迄か其難逃れ難し、されども返らぬ昔なり、向後浮世の姿をやめて、惜きと思ふ黒髪を切り出家となり、二人別々に住みて、悪心去て菩提の道に入らば、人も命を助くべしと、有難き夢心に、末々は何にならうとも構はしやるな、こちや是がすきにて身を替ての脇心、文珠様は衆道ばかりの御合點、女道は曾てしろしめさるまじと言ふかと思へば、いやな夢覺めて、橋立の松の風吹けば、塵の世じや物と、猶々やむ事のなかりし

## 身の上の立聞

悪しき事は身に覺えて博奕打まけてもだまり、傾城買取りあげられてかしこ顔するものなり、喧嘩しひけとる分かくし、買置の商人損を包み、是皆闇がりの犬の煮なべし、中にもいたづら氣質の女を持ちあはす男の身にして、是程情なき物はなし、おさん事も死にければ是非もなしと、其通りに世間をすまし、年月の昔を思ひ出て、にくしといふ心にも僧を招ぎて、亡き跡を弔ひける、哀や物好の小袖も旦那寺の旗天蓋と成り、無常の風にひるがへし、更に又嘆きの種となりぬ、されば世の人程大膽なるものはなし、茂右衛門共律義さ、闇には門へも出でざりしが、いつとなく身の事忘れて都ゆかしく思ひやりて、風俗卑げになし、編笠深くかづき、おさんは里人にあづけ置、無用の京上り、敵持つ身よりは猶恐ろしく行くに、程なく廣澤のあたりより暮々になつて、池に影二つの月にもおさん事を



思ひやりて、おろかなる泪に袖をひたし、岩に數ちる白玉は、鳴瀧の山を跡になし、御室北野の案内知るよし、急げば、町中に入て何とやら恐ろしげに、十七夜の影法師も我ながら我を忘れて、折々胸を冷して、住馴し旦那殿の町に入てひそかに様子を聞けば、江戸銀の遅き穿鑿、若いもの集つて頭つきの吟味、木綿着物物の仕立てぎはを改めける、是も皆色より起る男振ぞかし、物語せし末を聞くに、さてこそ我事申し出し、さてもく茂右衛門めは、ならびなき美人を盗み、をしからぬ命死でも果報と言へば、いかにもく一生の思ひ出と言ふもあり、また分別らしき人の言へるは、此茂右衛門め人間たる者の風上にも置く奴にはあらず、主人夫妻をたぶらかし、彼是ためしなき悪人と、義理をつめてそしりける、茂右衛門立聞して、慥今のは大文字屋の喜助めが聲なり、哀を知らずにくさげに物をいひ捨つるやつかな、おのれには預り手形にして銀八拾目の取替あり、今の代に首押へても取るべしと、齒ざしめして立ちけれ共、世にかくす身の是非なく、無

念の堪忍するうちに、又一人の言へるは、茂右衛門は今に死なずに、どこぞ伊勢のあたりにおさん殿を連れて居るといひ、よい事をしをると語る、是を聞くと身に震ひ出て俄に寒く、足早に立ちのき、三條の旅籠屋に宿借りて、水風呂にも入らず休みけるに、十七夜代待の通りしに、十二燈を包みて、我が身の事未々知れぬやうにと祈りける、其身の横しま愛宕様も何として助け給ふべし、明れば都の名残とて東山忍びく、四條川原にさがり、藤田狂言盡し三番續の始まりと言ひけるに、何事やらん見て歸りて、おさんに咄しにもと、圓座借りて遠目をつかひ、もしも我を知る人もと、心元なく見しに、狂言も人の娘を盗む所、是さへ氣味あしく、ならび先のかた見れば、おさん様の旦那殿、たましひ消えて地獄の上の一足飛、玉なる汗をかきて木戸口にかけ出、丹後なる里に歸り、其後は京こはかりき、折節は菊の節句近付きて、毎年丹後より栗商人の來りしが、四方山の咄しの次手に、いやこなたの御内儀様はと尋ねけるに、首尾あしく返事のもなし、

旦那だんな苦にがい貌かたちして、それはてこねたと言いはれける、栗賣くりうり重ねて申まをすは、物には似た人も有る物かな、これの奥おく様に微塵みじんも違ちがはぬ人、又若人わかしゅも生いうつしなり、丹後たんごの切戸きりど邊あたりに有ありけるよと語かた捨て、歸かへる、亭主ていしゅ聞き咎とがめて人造つかはし見けるに、おさん茂右衛門もげゑもんなれば、身みうち大勢おほしほ催もよほして捕とらへに遣つかはし、其科そのとがのがれず、様々の詮議せんぎ極きまめ、中なかの使つかひせし玉たまと言いへる女おんなも、同じ道筋みちすぢにひかれ、栗田口あはだぐちの露草つゆくさとはなりぬ、九月廿二日きゅうがつにじふににちの曙あけぼのの夢ゆめさらく最後さいごいやしからず、世語よごたりとはなりぬ、今いまも淺黄あさぎの小袖おちかけの面影おもかげ見るやうに名なは残りし

# 好色五人女

## 卷四

江戸江戸にあを物あをもの戀草こひぐさからげし八百屋物語やちやものがたり

### 目録

- 一 大節季おほせつきはおもひの闇やみ  
     かり着ぎの袖そでに二つ紋もん有
- 二 蟲出むしし神鳴かみなりも禪ぜんかきたる君きみさま  
     化物けぶつおそれぬ新發しんぱつ意い有

三 雪の夜の情宿

戀の道しる似せ商人有

四 世に見おさめの櫻

惜やすがたの散る人有

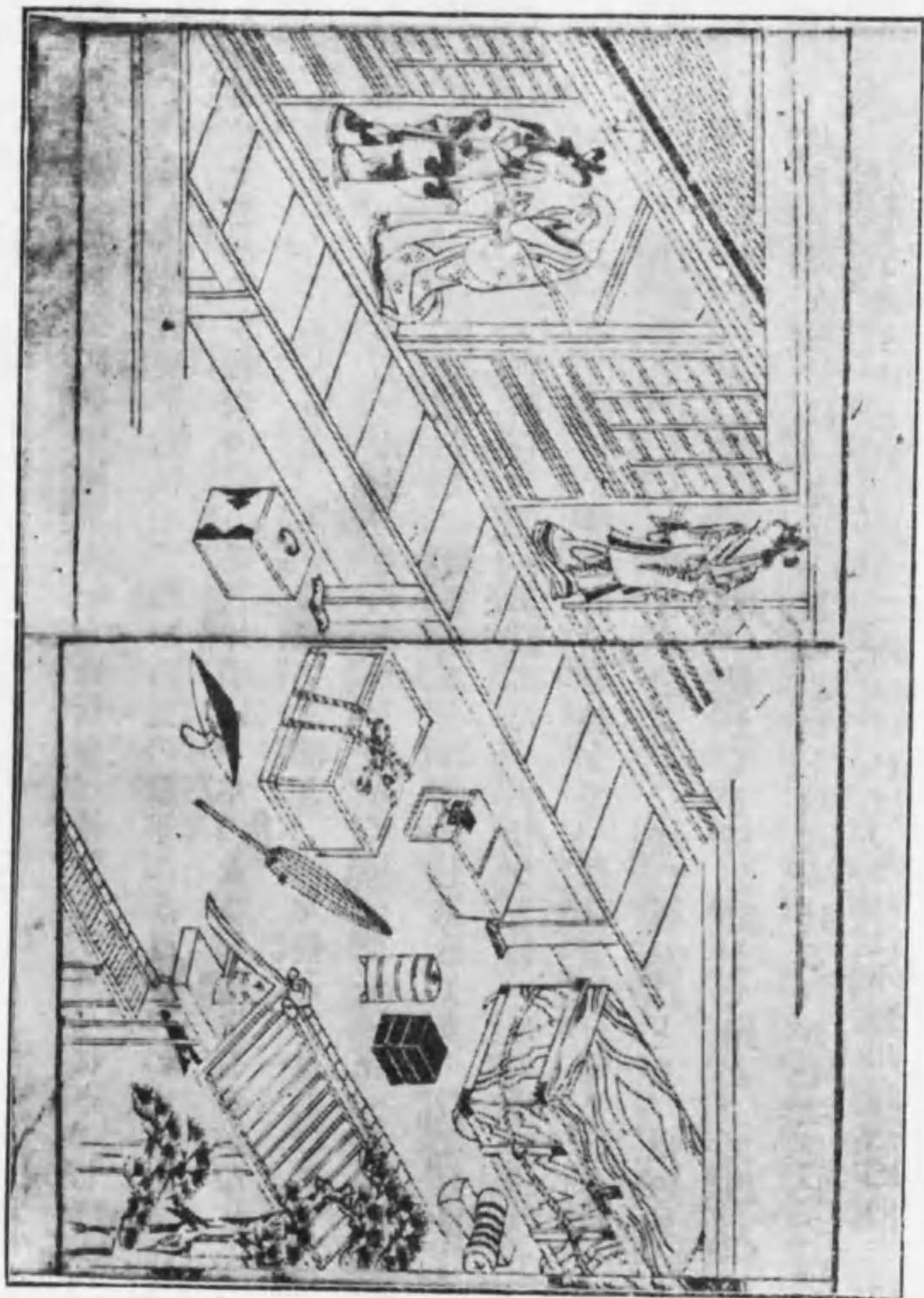
五 様子あつての俄坊主

前髪は又花の風より哀有

大節季はおもひの間

ならひ風烈しく、師走の空、雲の足さへ早く、春の事共取急ぎ、餅つく宿の隣には、小笹手毎に煤掃するもあり、天秤の金さえて、取やりも世の定めとていそがし、棚下を引連れ立ちて、こん／＼小目くららにお一文下されませいの聲やかましく、古札納め、さつ木賣、櫃かち栗鎌倉海老、通町には破魔弓の出見世、新物たび雪踏足を空にしてと、兼好が書出し思ひ合せて、今も世帯持つ身の暇なき事にぞ有ける、はやおしつめて廿八日の夜半に、わや／＼火宅の門は車長持ひく音、籠葛かけ硯肩に掛けてにぐるも有、穴藏の蓋とりあへず、かる物を投げ込みしに、時の間の煙となつて、焼野々雉子子を思ふが如く、妻をあはれみ、老母をかなしみ、それ／＼のしるべの方へ立ちのきしは、更に悲しさ限りなかりき、爰に本郷の邊に八百屋八兵衛とて賣人、昔は俗姓賤からず、此人一人の娘あり、名はお七

と言へり、年も十六、花は上野の盛、月は隅田川の影清く、かゝる美女のあるべきものか、都鳥その業平に時代違ひにて見せぬ事の口惜し、是に心を掛けざるはなし、此人火元近づけば母親につき添ひ、年頃頼をかけし旦那寺、駒込の吉祥寺といへるに行きて、當座の難をしのぎける、此人々に限らず、あまた御寺に駆入り、長老様の寢間にも赤子泣く聲、佛前に女の二布物を取りちらし、或は主人をふみこえ、親を枕とし、わけもなく臥しまろびて、明れば鑄鉢鉦を手水盥にし、お茶湯天目も假の飯椀となり、此中の事なれば、釋迦も見許し給ふべし、お七は母の親大事にかけ、坊主にも油断のならぬ世中と、萬に氣を付け侍る、折ふしの夜嵐を凌ぎかねしに、亭坊慈悲の心から、着替の有程出して貸されける中に、黒羽二重の大振袖に、梧銀杏の列べ紋、紅裏を山道のすそ取、わけらしき小袖の仕立、焼かけ残りてお七心にとまり、いかなる上臈が世を早ふなり給ひ、形見もつらしと、此寺に上り物かと我年の頃思ひ出して哀に痛ましく、あひ見ぬ人に無常



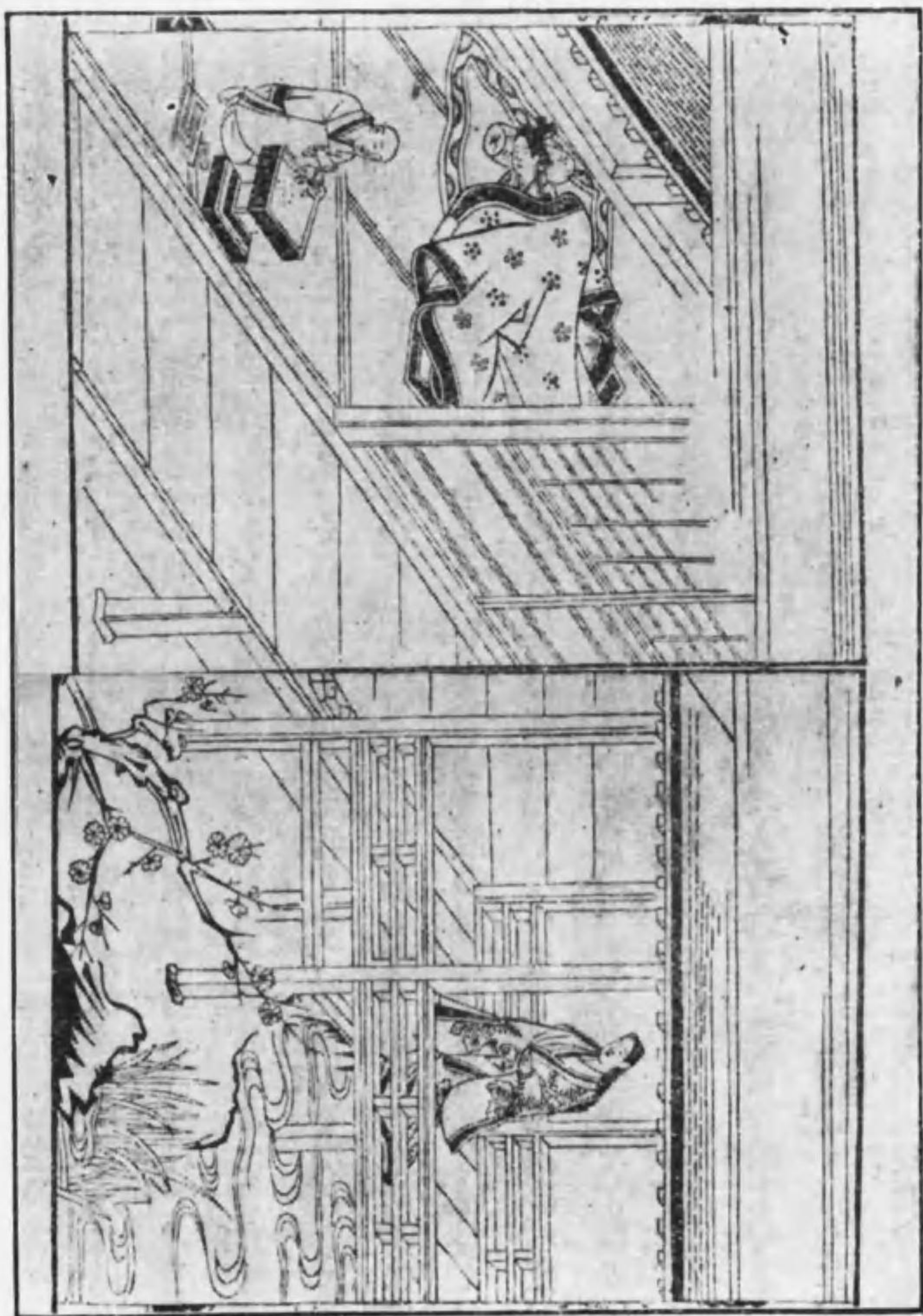
起りて、思へば夢なれや、何事もいらぬ世や、後生こそ真なれと、しほくと沈み果て、母人の珠數袋をあけて、願ひの玉の緒手につけ、口の中にして題目暇なき折柄、やごとなき若衆の銀の毛貫片手に、左の人さし指に有るかなきかのとげの立ちけるも心にかゝると、暮方の障子を閉き、身を惱みおはしけるを、母人見かね給ひ、抜きまゐらせんと、その毛貫を取りて暫くなやみ給へども、老眼のさだかならず、見付る事難くて、氣毒なる有さまお七見しより、我なら目時の目に抜かん物と思ひながら、近寄かねてたゞずむうちに、母人呼び給ひて、是をぬきて參らせよとの由嬉し、彼の御手を執りて、難儀を助け申しけるに、此若衆我を忘れて、自が手をいたくしめさせ給ふを、離れ難かれども、母の見給ふをうたてく、是非もなく立ち別れさまに、覺えて毛貫を取りて歸り、又返しにと跡を慕ひ、其手を握り返せば、是より互の思ひとはなりける、お七次第にこがれて、此若衆いかなる御方ぞと納所坊主に問ひければ、あれは小野川吉三郎殿と申して、

先祖正しき御浪人衆なるが、さりとはやさしく情の深き御方と語るにぞ、猶思ひまさりて、忍びくの文書きて人知れず遣はしけるに、便りの人かはりて、結局吉三郎方より、おもはく數々の文送りける心ざし、互に入亂れて、是を諸思ひとや申すべし、兩方共に返事なしに、いつとなく淺からぬ戀人こはれ人、時節を待つうちこそ浮世なれ、大晦日は思ひの闇に暮れて、明れば新玉の年の始め、女松男松を立飾りて、暦見そめしにも姫始めをかしかりき、されどもよき首尾なくて、つゐに枕も定めず、君がため若菜祝ひける日も終りて、九日十日過ぎ、十一日二十三日の夕暮、はや松の内も皆になりて、甲斐なく立ちし名こそはかなけれ

## 蟲出しの神鳴もふんどしかきたる君様

春の雨玉にもぬける柳原のあたりより參りけるの由、十五日の夜半に外門あらけなく

叩くにぞ、僧中夢驚かし聞きけるに、米屋の八左衛門長病なりしが、今宵相果申されしに、思ひまふけし死人なれば、夜のうちに野邊へ送り申し度との使なり、出家の役なればあまたの法師めしつれられ、晴間を待たず、傘をとりくゝに御寺を出て、行き給ひし跡は、七十に餘りし庫裏姥ひとり、十二三なる新發意一人、赤犬ばかり、残る物とて松の風淋しく、蟲出しの神鳴響き渡り、何れも驚きて、姥は年越の夜の煎大豆取出すなど、天井のある小座敷たづねて身をひそめける、母の親子を思ふ道に迷ひ、我をいたはり夜着の下へ引寄せ、厳しく鳴る時は耳ふさげなど心を付給ひける、女の身なれば恐ろしさ限りもなかりき、され共吉三郎殿に會ふべき首尾、今宵ならではと思ふ下心ありて、扱も浮世の人、何とて鳴神を怖れけるぞ、捨てゝから命少しも我は恐ろしからずと、女の強からずしてよき事に無用の言葉、末々の女共まで是をそしりける、やうく更過ぎて人皆自に寢入りて、射は軒の玉水の音をあらそひ、雨戸の隙間より月の光もありなしに静な



る折節、客殿を忍び出でけるに、身に震ひ出て足元も定めかね、枕ゆたかに臥し  
たる人の腰骨を踏みて、魂消ゆるが如く、胸いたく上氣して物は言はれず、手を  
合して拜みしに、此者我を咎めざるを不思議と、心をとめて詠めけるに、食炊か  
せける女のむめといふ下司なり、それをのり越えて行くを、此女裾を引きとゞめ  
ける程に、又胸さはぎして我留るかと思へば、さにはあらず、小半紙一折手に渡  
しける、さてもく徒仕付て、かゝる忙しき折柄も氣の付きたる女ぞと嬉しく、  
方丈に行きて見れども、彼兒人の寢姿見えねば悲しくなつて、臺所に出ければ、  
姥目覺し、今宵鼠めはとつぶやく、片手に椎茸の煮しめ、あげ麵葛袋など取り置  
くもをかし、しばしあつて我を見付て、吉三郎殿の寢所はそのく小坊主とひと  
つに三疊敷にと肩たゝいて小話さける、思ひの外なる情知り、寺には惜しやとい  
としくなりて、して居る紫鹿子の帯解きて取らし、姥が教へけるに任せ行くに、  
夜や八ツ頃なるべし、常香盤の鈴落ちて響渡る事暫くなり、新發意其役にやあり

つらん、起きあがりて、糸かけ直し香盛りつぎて、座を立たぬ事とけしなく、寢  
所へ入るを待ちかね、女の出来心にて髪をさばき、こはい貌して闇がりよりおど  
しければ、流石佛心そなはりて少しも驚く氣色なく、汝元來帶とけひろげにて、  
世に徒者や、忽ち消え去れ、此寺の大黒になりたくば、和尚の歸らるゝ迄待と、  
目を見ひらき申しける、お七しらけて走り寄り、こなたを抱いて寢に來たといひ  
ければ、新發意笑ひ、吉三郎様の事か、おれと今迄跡さして臥しける、其證據に  
は是ぞと、こぶくめの袖をかざしけるに、白菊などいへる留木の移り香、どうも  
ならぬと打ちなやみ、其寢間に入るを、新發意聲立て、はあお七様よい事をと  
言ひけるに又驚き、何にてもそなたのほしき物を調へ進ずべし、だまり給へと言  
へば、それならば錢八十と、松葉屋のかると、淺草の米饅頭五ツと、世に是よ  
りほしき物はないといへば、それこそやすい事、明日ははやく遣はし申すべき  
と約束しける、此小坊主枕かたむけ、夜が明けたらば三色もらふ筈、必もらふ

筈と、夢にも現にも申し寢入に静りける、その後は心任せになりて、吉三郎寢姿に寄添ひて、何共言葉なくしどけなくもたれかゝれば、吉三郎夢さめて猶身を震はし、小夜着の袂引被りしを引のけ、髪に用捨もなき事やといへば、吉三郎せつなく、私は十六になりますと言へば、お七妾も十六になりますと言へば、吉三郎重ねて長老様がこはやといふ、おれも長老様はこはしといふ、何とも此戀始めもどかし、後は二人ながら涙をこぼし、不埒なりしに、又雨のあがり神鳴あらけなく響きしに、是は本にこはやと吉三郎にしがみ付きけるにぞ、自らわりなき情深く、冷えわたりたる手足やと肌へ近よせしに、お七恨みて申し侍るは、そなた様にもにくからねばこそ、よしなき文給はりながら、かく身を冷せしは誰がさせけるぞと首筋に喰ひつきける、いつとなくわけもなき首尾して、ぬれそめしより袖は互に、限りは命と定めける、程なく曙近く、谷中の鐘せはしく、吹上の榎の木朝風烈しく、恨めしや、今寢ぬくもる間もなく、あかぬは別れ、世界は廣し、晝

を夜の國もがなと、俄に願ひとても叶はぬ心をなやませしに、母の親是はと尋ね来て、ひつたて行かれし、思へば昔男の鬼一口の雨の夜の心地して、吉三郎呆れ果て悲しかりき、新發意は宵の事を忘れず、今の三色の物を給はらずば、今夜の有様告げんと言ふ、母親立歸りて、何事か知らね共、お七が約束せし物は、我が請に立つと言ひ捨て、歸られし、いたづらなる娘もちたる母なれば、大方なる事は聞かでも合點して、お七よりは猶心を付て、明日早く共弄びの品々調へて贈り給ひけるとや

## 雪の夜の情宿

油断のならぬ世の中に、殊更見せまじき物は、道中の肌付金、酒の酔に脇指、娘の際に捨坊主と、御寺を立ち歸りて其後は厳しく改めて戀をささける、され共下女か情にして文は數通はせて、心の程は互に知らせける、或夕板橋近き里の子と



見えて、松露土筆を手籠に入れて、世をわたる業として賣りきたれり、お七親の方  
 に買ひとめける、其暮は春ながら雪降りやまずして、里までかへる事をなげきぬ、  
 亭主あはれみて何心もなく、つい庭の片角にありて、夜明けなば歸れと言はれし  
 を嬉しく、牛蒡大根の薤かたよせ、竹の小笠に面をかくし、腰裏身にまとひ一夜  
 を凌ぎける、嵐枕に通ひ、土間冷え上りけるにぞ、大方は命も危うかりき、支第  
 に息もきれ眼もくらみし時、お七聲して、先程の里の子哀や、せめて湯成とも吞  
 せよと有りしに、飯炊の梅が下の茶碗に汲みて、久七にさし出しければ、男請取  
 りて是をあたへける、忝き御心入と言へば、くらまされに前髪を鬪りて、我も  
 江戸においたらば念者有る時分じやが、痛はしやといふ、いかにも淺ましくそだ  
 ちまして、田をすく馬の口を取り、眞柴刈るより外の事を存じませぬといへば、  
 足をいらひて、奇特にあかじりを切さぬよ、是なら口を少しと口を寄せけるに、  
 其悲しさ切なさ、齒を喰ひしめて涙こぼしけるに、久七分別していやく根深に



んにく喰ひし口中も知れずとやめける事の嬉し、其後寢時に成りて、下々はうちつけ階子を登り、二階にともし火影うすく、あるじは戸棚の錠前に心を付れば、内儀は火の用心能々云付て、猶娘に氣遣ひせられ、中戸さしかためられしは、戀路網切れてうたてし、八つの鐘の鳴る時、表の戸叩いて、女と男の聲して、申し娘様只今喜び遊ばしましたが、しかも若子様にて旦那様の御機嫌と、頻によばはる、家内起きさわぎて、それは嬉しやと寢所より直に夫婦連立ち出さまに、まくり甘草を取持ちて、かたしくの草履をはき、お七に門の戸をしめさせ、急ぐ心ばかりにゆかれし、お七戸をしめて歸りさまに、暮方里の子思ひやりて、下女に其手燭待てとて面影を見しに、豊に臥していと哀の増りける、心よく有りしを共まゝおかせ給へと、下女のいへるを聞かぬ貌して近く寄れば、肌につし兵部卿のかをり、何とやらゆかしくて、笠を取除け見ればやごとなき脇貌のしめやかに、鬢もそゞけざりしをしばし見とれて、その人年頃に思ひ出だして、袖に手をさし

入れて見るに、淺黄羽二重の下着、是はと心をとめしに吉三郎殿なり、人の聞くをもかまはず、こりや何としてかゝる御姿ぞと、しがみ付て嘆きぬ、吉三郎も面見合せ、物之言はざる事しばらくありて、我かく姿を替て、せめては君をかりそめに見る事願ひ、宵の憂き思ひおぼしめしやられよと、始めよりの事共をつとつどに語りければ、兎角は是へ御入有て、其御恨みも聞きまゐらせんと、手を引きまゐらすれども、宵よりの身のいたみ是非もなく哀なり、やうく下女と手を組みて車に昇き乗せて、常の寢間に入りまゐらせて、手のつゞく程はさすりて、幾薬を與へ、すこし笑ひ貌嬉しく、盃事して今宵は心に有る程を語り盡しなんと喜ぶ所へ、親父歸らせ給ふにぞ、重ねて憂き目にあひぬ、衣桁の蔭に隠してさらぬ有様にて、いよ／＼おはつ様は親子とも御まめかと言へば、親父喜びて、ひとり姪なれば、とやかく氣遣せしに、重荷おろしたと、機嫌よく産着の模様せんさく、萬祝ひて鶴龜松竹のすり箔はと申されけるに、おそからぬ御事明日御心静に

と、下女も口々に申せば、いや／＼かやらの事は早きこそよけれと、木枕鼻紙をたゝみかけて、雛形を切らるゝこそうたてけれ、やう／＼其程過ぎて色々たらしめて寝せまして、語りたき事ながら、襖障子ひとへなれば、もれ行事を恐ろしく、燈の影に硯紙置きて、心の程を互に書いて、見せたり見たり、是を思へば鴛の襖とやいふべし、夜もすがら書きくどきて、明方の別れ、又もなき戀が餘りて、さりとは物憂き世や

## 世に見おさめの櫻

それとは言はずに明暮女心の慕なや、逢ふべきたよりも無ければ、ある日風のはげしき夕暮に、日外寺へにげ行く世間の騒ぎを思ひ出して、又さもあらば吉三郎殿にあひ見る事の種とも成りなんと、よしなき出来心にして、悪事を思ひ立つこそ因果なれ、少しの烟立ちさわぎて、人々不思議と心懸け見しに、お七が面影を

あらはしける、これを尋ねしに包まず有りし通りを語りけるに、世の哀とぞなりにける、けふは神田のくづれ橋に耻を晒し、又は四ッ谷、芝の淺草、日本橋に人こぞりて見るに惜まぬはなし、是を思ふに、假にも人は悪事をせまじき物なり、天是をゆるし給はぬなり、此女思ひ込みし事なれば、身のやつるゝ事なくて、毎日有りし昔の如く、黒髪を結せて麗き風情、惜や十七の春の花も散々に、時鳥までも總鳴に卯月の始めずかた、最後ぞとすゝめけるに、心中更にたがはず、夢幻の中ぞと一念に佛國を願ひける心ざし、去逆は痛はしく、手向花とて咲き後れし櫻を一本持たせけるに、打ち詠めて、世の哀れ春吹く風に名を残し、後れ櫻のけふ散りし身は、と吟じけるを、聞く人一しほにいたはしく、この姿を見送りけるに、限りある命のうち、入相の鐘つく頃、品かはりたる道芝の邊にして、其身はうき煙となりぬ、人皆何れの道にも煙は逃れず、殊に不便は是にぞ有ける、それはさのふ、今朝見れば塵も灰もなく、鈴の森松風ばかり残りて、旅人も聞き傳

へて只是通らず、回向して其跡を弔ひける。されば其日の小袖郡内縞のきれく、  
迄も、世の人拾ひもとめて、末々の物語の種とぞ思ひける、近付ならぬ人さへ忌  
日々々に櫛折立て、此女をとひけるに、其契を込めし若衆は、いかにして最後を  
尋ね問はざる事の不思議と、諸人沙汰し侍る折節、吉三郎は此女に心地なやみて  
前後を辨へず、憂き世の限りと見えて、便りすくなく現の如くなれば、人々の心  
得にて、此事を知らせなば、よもや命も有るべきか、つねく申せし言葉の末、  
身の取置迄して最期の程を待ち居しに、思へば人の命やと、首尾よしなに申しな  
して、けふ明日の内には其人爰にましまして、思ふまゝなる御げんなどいひける  
にぞ、一入心を取直し、與へる薬を外になして、君よ戀し其人まだかと、そゞろ  
言いふ程こそあれ、知らずやけふは早三十五日と、吉三郎にはかくして其女弔ひ  
ける、それより四十九日の餅盛など、お七親類御寺に参りて、せめて其戀人を見  
せ給へと歎きぬ、様子を語りて又も哀を見給ふなれば、よし／＼其通りにと道理

を責めければ、流石人たる人なれば、此事聞きながら、よもやながらへ給ふまじ、  
深く包みて病氣恙なき身の、折節お七が申し残せし事共をも語りなぐさめて、我  
子の形見にそれなりとも思ひはらしにと、卒塔婆書たて、手向の水も泪にかは  
かぬ石こそ亡き人の姿かと、跡に残りし親の身、無常の習とて是逆の世や

## 様子あつての俄坊主

命程頼みすくなくて、又つれなき物はなし、中々死ぬれば怨みも戀もなかりしに、  
百ヶ日に當る日枕始めてあがり、杖竹を便りに寺中靜に初立しけるに、卒塔婆の  
新しきに心をつけて見しに、其人の名に驚きて、さりとは知らぬ事ながら、人  
はそれとは言はじ、後れたるやうに取沙汰も口惜と、腰の物に手を掛けしに、法  
師取つき、さま／＼とゞめて、迎も死すべき命ならば、年月語りし人に暇乞をも  
して、長老様にも其断りを立て、最後を極め給へかし、子細はそなたの兄弟契約

の御方より、當寺へ預け置き給へば、其御手前への難儀、彼是覺しめし合せせられ、此上ながら憂き名の立たざるやうにと諫めしに、此斷り至極して自害思ひ止まりて、兎角は世にながらへる心ざしにはあらず、其後長老へかくと申せば、驚かせ給ひて、其身は念頃に契約の人、わりなく愚僧を頼まれ、預りおきしに、其人今は松前に罷りて、この秋の頃は必爰に罷るの由くれく、此程も申し越されしに、それよりうちに申す事もあらば、さしあたつての迷惑我ぞかし、兄分かへられての上に、其身はいかやうとも成りぬべき事こそあれと、色々異見遊ばしければ、日頃の御恩思ひ合せて、何か仰せは洩れじと御請申しあげしに、猶心もとなく覺し召されては、物を取りてあまたの番を添られしに、是非なく常なる部屋に入りて人々に語りしは、さてもくわが身ながら世上のそしりも無念なり、未だ若衆を立てし身の、よしなき人のうき情にもだし難くて、剩其人の難儀、此身の悲しさ、衆道の神も佛も我を見捨て給ひしと感涙を流し、殊更兄分の人歸られて

の首尾、身の立つべきにあらず、それより内に最後急ぎたし、され共舌喰切、首しめるなど世の聞えも手ぬるし、情に一腰かし給へ、なにながらへて甲斐なしと、涙に語るにぞ、座中袖をしぼりて深く哀みける、此事お七親より聞きつけて、御歎尤とは存じながら、最後の時分くれく、申し置きけるは、吉三郎殿誠の情あらば、浮世捨てさせ給ひ、いかなる出家にもなり給ひて、かくなり行く跡をとばせ給ひなば、いかばかり忘れ置くまじき、二世迄の縁は朽ちまじと申し置しと、様々申せども中々吉三郎聞分せず、いよく思ひ極めて舌喰ひ切る色めの時、母親耳近く寄りて、しばし小語申されしは、何事にか有哉らん、吉三郎うなづきて、兎も角もと言へり、其後兄分の人も立ち歸り、至極の異見申し盡して出家と成りぬ、此前髪の散る哀、坊主も剃刀なげ捨て、盛りなる花に時のまの嵐の如く思ひくらぶれば、命は有りながらお七最期よりは猶哀なり、古今の美僧是を惜まぬはなし、惣じて戀の出家まことあり、吉三郎兄分なる人も、古里松前に歸り、墨染

の袖そでとはなりけるとや、さてもく取集あつめたる戀こひや哀あはれや、無常むじやうなり、夢ゆめなり、現うつなり

# 好色五人女

## 卷五

さつつまにまに戀こひの山源五兵衛物語

### 目録

一 いれ吹ふきの笛竹息ふえたけいきのあはれや

薩摩さつまに隠かくれなき當世たうせい男をとこ有

二 もろきは命いのちの鳥とりさし

床とこはむかしと成なる若衆わかしゅ有

三 衆道は兩の手に散花

中刺はいたづら女有

四 情はあちらこちらのちがひ

同じ色ながら緋縮緬の二布物有

五 金銀も持あまつて迷惑

三百八十の鍵あづかる男有

世に時花歌源五兵衛といへるは、薩摩の國鹿兒島の者なりしが、かゝる田舎には

連吹の笛竹息の哀や

世に時花歌源五兵衛といへるは、薩摩の國鹿兒島の者なりしが、かゝる田舎には  
 稀なる色好める男なり、あたまつきは所ならはしにして、後さがりに髪先短く、  
 長脇差も優れて目立なれども、國風俗、是をも人のゆるしける、明暮若道に身を  
 なし、よわくとしたる髪長のたはぶれ一生知らずして、今は早廿六歳の春とぞ  
 なりける、年久しく不便をかけし若衆に、中村八十郎といへるに、始めより命を  
 捨て、浅からず念友せしに、又あるまじき美兒、たとへて言はゞ一重なる初櫻の、  
 なかば開きて花の物云ふ風情たり、或夜雨の淋しく只二人、源五兵衛住みなせる  
 小座敷に取りこもり、つれ吹の横笛更にまたしめやかに、物の音も折にふれては  
 哀さも一入なり、窓より通ふ嵐は梅が薫りをつれて振袖に移り、吳竹のそよぐに  
 寝鳥騒ぎて、飛びかふ音も悲しかりき、燈自に影ほそく、笛も吹き畢りて、いつ

よりは情らしく、うちまかせたる姿して、心よく語りし言葉に一つ／＼品替りて戀をふくませ、さりとはいとしさ増りて、浮世外なる慾心出來て、八十郎形のいつまでもかはらで前髪あれかしとぞ思ふ、同じ枕しどけなく、夜の明方になりていつとなく眠れば、八十郎身をいためて起し、あたら夜を夢にはなし給ふといへり、源五兵衛現に聞いて心さだまりかねしに、我に語給ふも今宵を限りなりしに、何か名残に申したまへる事もといへば、寢耳にも悲しくて、假にも心掛りなり、ひとへ逢はぬさへ面影幻に見えけるに、いかに我にせかすればとて、今夜限りとは無用の言事やと、手を取交せば、少しうち笑ひて、是非なきは浮世、定め難きは人の命と言ひ果てず、其身は忽ち脈上りて、誠の別れとなりぬ、是はと源五兵衛騒ぎて、忍びし事も外にして、男泣にどよめば、皆々立寄さま／＼薬あたへける甲斐なく、萬事のこと切れてうたてし、八十郎親元に知らせければ、二親の嘆き限りなし、年月親くまし／＼ける中なれば、八十郎が最期何か疑ふ迄もなし、

それからそれ迄、兎角は野邊へ送りて、其姿を其まゝ大龜(瓶)に入れて、萌え出る草の片蔭に埋めける、源五兵衛此塚に伏し沈みて悔ども、命捨つべきより外なく、とやかく物思ひしが、さても／＼脆き人かな、せめては此跡三年は弔ひて、月も日も又けふにあたる時、必爰に來て露命と定むべきものをと、野墓よりすくに鬘切りて、西園寺といへる長老に始めを語り、心からの出家となりて、夏中は毎日の花を摘み香を絶さず、八十郎菩提をとひて夢の如く其秋にもなりぬ、垣根朝貌咲きそめ、花又世の無常を知らせける、露は命よりは間のあるものぞと、歸らぬ昔を思ひけるに、此夕暮は亡き人の來る魂祭るわざとて、鼠尾草折りしきて、瓜なすびおかしげに、枝大豆枯々に折りかけ、燈籠かすかに棚懸せはしく、迎ひ火に麻がらの影きえて、十四日の夕暮暮、寺も借銭はゆるさず掛乞やかましく、門前は踊太鼓響き渡りて、爰もまたいやらしくなりて、一度高野山への心ざし、明くれば文月十五日古里を立出るより、墨染は泪にしらせて、袖は朽けると也、



## もろきは命の鳥さし

里は冬構へして萩柴折添へて、ふらぬさきより雪垣など、北窓をふさぎ、衣うつ音のやかましく、野はづれに行けば紅林にねぐら争ふ小鳥を見掛け、其年の程十五か六か七までは行かじ、水色の袴帷子に、紫の中幅帯、金鈿の一つ脇差、髪は茶筌に取亂し、そのゆたけさ女の如し、さし竿の中ほどを取まはして、色鳥をねらひ給ひし事百たびなれ共、一羽もとまらざりしを本意なき有様、しばし見とれて、さても世にかゝる美童も有るものぞ、其年の比は過ぎにし八十郎に同じ、麗き所はそれに増りけるよと、後世を取はづし、暮方まで詠つくして、其方近く立寄りて、某は法師ながら、鳥さしてとる事を得たり、其竿こなたへと片肌ぬぎかけて、諸々の鳥共此兒人のお手にかゝりて命を捨つるが何とて惜きぞ、さてもさても衆道のわけ知らずめと、時の間に數限りもなく取りまゐらせければ、此若衆

外なく嬉しく、いかなる御出家ぞと問はせける程に、我を忘れて始めを語りければ、此人もだくと涙ぐみて、それゆへの御修行一しほ殊勝さ思ひやられける、是非に今宵は我笹葺に一夜ととめられしに、なれしくも伴ひ行くに、一構への森の中に奇麗なる殿作りありて、馬の嘶く音、武器飾らせて、廣間を過ぎて縁より梯の遙に、熊笹むら／＼として、其奥に庭籠ありて、はつがん唐鳩金鶏さまさまの聲なして、少し左の方に中二階四方を見晴し、書物棚しほらしく、爰は不斷の學問所とて是に座をなせば、召使のそれ／＼を召され、此客僧は我物讀のお師匠なり、よくもてなせとて、かず／＼の御事ありて、夜に入ればしめやかに語り慰み、いつとなく契りて千夜とも心を盡しぬ、明れば別を惜み給ひ、高野の思召立ち必下向の折ふしは、又もと約束深くして、互に泪較べて、人知れずその屋形を立退き、里人に尋ねけるに、あれは此所の御代官と、しか／＼の事を語りぬ、さてはとお情嬉しく、都に上るもはかどらず、過にし八十郎を思ひ出し、又彼若

衆の御事のみ、佛の道は外になして、やう／＼弘法の御山にまゐりて、南谷の宿坊に一日ありて、奥の院にも參詣せず、又國元に歸り、約束せし人の御方に行けば、日外見し御姿變らず出迎ひ給ひ、一間なる所に入て、此程の積りし事を語り、旅草臥の夢結びけるに、夜も明けて彼御人の父、此法師を怪く咎め給ひ、起され驚き、源五兵衛落髮の始め、又此度の事、有の儘に語れば、あるじ横手打つて、さても／＼不思議や、我子ながら姿自慢せしに、浮世とて果敢なく、此二十日餘りに成りし跡に、もろくも相果てしが、其際迄彼御法師／＼と申せしを、冒されての事と思ひしに、扱はそなたの御事かと、くれ／＼嘆き給ひける、猶命惜からず、此座を去らず身を捨つべきと思ひしが、さりとは死なれぬもの人の命にぞ有りける、間もなく若衆二人迄の憂目を見て、いまだ世にある事の心ながら口惜し、さる程に此二人が我にかゝる憂き事知らせける、大方ならぬ因果とや、是を申すべし、かなし

## 衆道は兩の手に散花

人の身程淺ましくつれなき物はなし、世間に心をとめて見るに、未だいたいけ盛の子を失ひ、又は末々永く契を籠めし妻の天死、かゝる哀を見し時は即座に命を捨てんと、我も人も思ひしが、泪の中にもはや慾といふ物つたなし、萬の寶に心を移し、あるは又出来分別にて息も引取らぬうちより、女は後夫の穿鑿を耳に掛け、其死人の弟をすぐに跡しらすなど、又は一門より似合しき入縁取る事、心魂にのりて、なじみの事は外になし、義理一べんの念佛、香花も人の見るためぞかし、三十五日の立つをとけしなく、忍び／＼の薄白粉、髪は品よく油にしたしなから、結びもやらずしどけなく、下着は色を含ませ、上には無紋の小袖、目に立たずして猶心にくき物ぞかし、折節は無常を觀じ、はかなき物語のついでに髪を切り、浮世を野寺に暮して、朝の露をせめては草の蔭なる人に手向なんと、縫箔

鹿子の衣装取りちらし、これもいらぬ物なれば天蓋、幡、打敷にせよといふ心には、今少し袖の少さを悲しみける、女程恐ろしきものはなし、何事をも留めける人の中にては、空泣して感しける、されば世の中に化物と後家立て済ます女なし、まして男の女房を五人や三人殺して後、呼び迎へても科にはならじ、それとは違ひ源五兵衛入道は、若衆二人迄あへなきうき目を見て、誠なる心から、片山蔭に草庵を引結び、後の世の道ばかり願ひ、色道かつてやめしは、更に殊勝さ限りなし、其頃又薩摩濁濱の町といふ所に、琉球屋の何がしが娘あまんといへる有りけり、年の程十六夜の月をもそねむ生れつき、心ざしもやさしく、戀の只中見し人思ひ掛けざるはなし、此女過ぎし年の春より源五兵衛男盛をなづみて、數々の文に氣をなやみ、人知れぬ便りにつかはしけるに、源五兵衛一生女を見限り、かりそめの返事もせざるを悲み、明暮是のみにて日數を送りぬ、外より縁のいへるをうたてく、思ひの外なる作病して人の嫌ふうは言など云うて、正しく亂人と

は見えける、源五兵衛姿をかへにし事も知らざりしに、或時人の語りけるを聞きもあへず、さりとは情なし、いつぞの時節にはこの思ひを晴すべきと樂みける甲斐なく、惜や其人は墨染の袖恨めしや、是非それに尋ね行きて、一度此恨を言はではと思ひ立つを、世の別と人々に深く隠して、自よきほどに切て中刺して、衣類も兼ての用意にや、まんまと若衆にかはりて忍びて行くに、戀の山入そめしより、根笹の霜を打ち拂ひ、頃は神無月偽りの女心にして、はるく過ぎて人の申せし里ばなれなる杉村に入れば、後に荒けなき岩組ありて、西の方に洞深く、心も是にしづむばかり、朽木のたよりなき丸太を二つ三つ四つ並べてなげ渡し、橋も物すごく、下は瀬の早き浪も碎けて、魂散るが如く、わづかの平地の上に片びさしおろして、軒端はもろくの葛這ひかゝりて自の滴、愛の私雨とや申すべき、南の方に明り窓有て、内を覗けば賤の屋にありしちんからりとやいへる物一つに、青き松葉を焼捨て、天目二つの外には、杓子といふ物もなくて、さりとは

は浅まし、かゝる所に住みなしてこそ佛の心にも叶ひてんと見廻しけるに、ある  
じの法師ましまさぬ事なげかはしく、何國へと尋ねべき方も、松より外にはなく  
て、戸の明くを幸に入て見れば、見臺に書物ゆかしさに覗けば、待宵の諸袖とい  
へる衆道の根元を書きつくしたる本なり、さては今も此色は捨て給はずと、其人  
のお歸りを待詫しに、ほどなく暮れて文字も見え難く、ともし火のたよりもなく  
て、次第に淋しく獨明しぬ、是戀なればこそかくは居にけり、夜半と思ふ時、源  
五兵衛入道わづかなる松火に道をわけて、菴近く立歸りしを嬉しく思ひしに、枯  
葉の萩原よりやごとなき若衆、同じ年比なる花か紅葉か、何れか色を争ひ、一人  
は恨み、一人は歎き、若道のいきごみ、源五兵衛坊主は一人、情人は二人、あな  
たこなたのおもはく、戀にやる瀬なくさいなまれて、もだくとして悲き有様、  
見るも哀れ、又興覺めて、扱もく心の多き御方と、少しはうるさかりき、され  
共思ひ込し戀なれば、此まゝ置くべきにもあらず、我も一通り心の程を申しほど

きてなんと立出れば、此面影に驚き、二人の若衆姿の消えて、是はと思ふ時、源  
五兵衛入道不思議たちて、いかなる見人様ぞと言葉を掛ければ、おまん聞きもあ  
へず、我事見えわたりたる通りの若衆を少したて申し、かねく御法師様の御事  
聞き傳へ、身を捨て是迄忍びしが、さりとてはあまたの心入、それとも知らずせつ  
かく氣運びし甲斐もなし、おもはく違ひとらみけるに、法師横手を折つて、是  
は忝なき御心ざしやと、又移氣になりて、二人の若衆は世を去りし現の始を語る  
にぞ、共に涙をこぼし、其かはりに我を捨て給ふなと言へば、法師感涙流し、此  
身にも此道は捨て難しとはやたはぶれける、女ぞと知らぬが佛さまも許し給ふべ  
し

情はあちらこちらの違ひ

我そもく出家せし時、女色の道はふつと思ひ切りし佛願なり、され共心中に美



のへだては無き物と、あさましく取亂して移氣の世や、心の外なる道心、源五兵衛に限らず、皆是なるべし、思へばいやのならぬおとし穴、釋迦も片足踏込み給ふべし

金銀も持あまつて迷惑

頭は一年物、衣を脱げば昔に變る事なし、源五兵衛と名にかへりて、山中の梅唇うか／＼と精進の正月をやめて、二月始めつ方、鹿兒島の片蔭に、昔のよしみの人を頼みて、僅なる板庇を借りて忍び住ひ、何か渡世の便もなく、源五兵衛親の家居に行きて見しに、人手に賣代りて、兩替屋せし天秤の響絶えて、今は軒口に味噌の看板かけしなど口惜しく眺め過ぎて、我見知らぬ男にたよりて、このあたりに住まれし源五右衛門といへる人はと尋ねけるに、申し傳へしを語る、始めはよろしき人なるが、其子に源五兵衛といへる有り、此國にまたとなき美男、又な



き色好、八年此かたに凡そ千貫目を無くなして、あたら浮世に親はあさましく、其身は戀より捨坊主になりけるとなり、世にはかゝるうつけも有るものかな、末末語句に、そいつ奴が面を一目見たい事と言へば、其貌爰にある物と耻かしく、編笠深々と傾け、やう／＼宿に立歸り、夕は燈も見ず、朝の割木絶えて、さりと悲しく、人の戀も濡れも世のある時の物ぞかし、同じ枕は並べつれども、夜語るべき言葉もなく、明れば三月三日童子草餅配るなど、鶏合せ、さま／＼の遊興ありしに、我宿の淋しさ、神の折敷はあれど鯛もなし、桃の花を手折して酒なき徳利にさし捨て、其日も暮て四日猶うたてし、互に世を渡る業とて、都にて見覺えし芝居事種となりて、俄に貌を作り髭、戀の奴の物まね、嵐三右衛門がいさうつし、やつこの／＼とは歌へども、腰さだめかね、源五兵衛どこへ行く、薩摩の山へ、鞆が三文下緒が二文、中は檜木のあらけなき聲して、里々の子供をすかしぬ、おまんは晒布の狂言綺語に身をなし、露の世を送りぬ、是を思ふに、戀にや

つす身、人をも耻ぢらへず、次第にやつれて、昔の形はなかりしを、つらき世間なれば、誰憐む方もなくて、自萎れ行く紫の藤の花、ゆかりを恨み身を嘆き、けふを限りとなり果てし時、おまん二親は此行方尋ね詫しに、やう／＼探し出して、悦ぶ事の數々、兎角娘のすける男なれば、ひとつになして此家を渡せと、あまたの手代來りて、二人を迎へ歸れば、何れも悦びなして、物數三百八十三の諸の鍵を源五兵衛に渡されける、吉日を改め藏開させしに、判金二百枚入の書付の箱六百五十、小判千兩入の箱八百、銀十貫目入の箱は徴生えて、下よりうめく事すさまじ、丑寅の角に七つの壺あり、蓋ふきあがる程、今極め一步錢などは砂の如くにしてむさし、庭藏見れば元渡りの唐織山をなし、伽羅掛木の如し、珊瑚珠は壹匁五分から百三十目迄の無疵の玉千二百三十五、柄籠、青磁の道具限もなく、飛鳥川の茶入、かやうの類ごろつきてめげるをかまはず、人魚の鹽引、瑪瑙の手桶、かんたんの米かち杵、浦島が庖丁箱、辨天の前巾着、福録壽の剃刀、多門天の枕

鎗、大黒殿の千石どほし、ゑびす殿の小遣帳、覺え難し、世に有る程の萬寶ない物はなし、源五兵衛嬉し悲しく、是を思ふに江戸京大坂の太夫残らず請けても、芝居銀本して捨てゝも、我一代に皆になし難し、何とぞ費ひ減らす分別出でず、是はなんとした物であらう

貞享二龍集丙寅歲仲春上旬日

北御堂前

攝州書肆

森田庄太郎板

入稿

好色一代女





# 好色一代女

## 卷一

### 目録

老女らうにょ 隠家かくれが

舞曲まきょく 遊興いうきょう

都に是沙汰の女尋ねて

昔物語を聞けば

一代のいたづら

さりとは浮世のしやれ者

今もまだ美しき

清水の初櫻に見し幕の内は

一ふしのやさしき娘いか成人の

ゆかりそ親はく

あれをしらずや祇園町のそれ

今でも自由になるもの

國主艶妾

三十日ぎりの手掛者にはあらず  
よしある人の息女も  
末をたのみにやる事  
扱は假初になるまい  
なるとも／＼望次第

淫婦美形

京のよい中をあらためたる女  
島原の太夫職の風俗  
よしあしの詮議がくどい  
思はく丸裸にして語るに  
思ひの外なる内證

姿のかくれ里にたづね入 世に有程の女物語 きけば開程

都は櫻咲東山の事 何國にも女は あれどこんなもの

千人の中にも ないといふは捨金貳百兩

島原見た目に 外の紅葉も月も地口

老女の隠家

美女は命を斷斧と古人もいへり、心の花散夕の焼木となれるは何れか是をのがれ  
し、されども時節の外なる朝の嵐とは、色道に溺れ若死の人こそ愚なれ、其種は  
盡もせず人の日の始め、都の西嵯峨に行事ありしに、春も今どと花の唇動く梅津  
川を渡りし時、うつくしげなる當世男の采體しどけなく、色青ざめて戀に貌をせ  
められ、行末頼みすくなく、追付親に跡やるべき人の願ひ、我萬の事に何の不足  
もなかりき、此川の流れの如く契水絶ずもあらまほしきといへば、友とせし人驚  
き我は又女のなき國もがな、其所に行て閑居を極め惜き身をながらへ、移り替れ

る世のさまざまを見る事もといふ、此二人生死各別のおもはく違ひ、人命短長の間、今に見果ぬ夢に歩み、現に言葉をかはずが如く、邪氣亂募つて漂行れし道は一筋の岸根傳ひに、防風蓆など萌出るを用捨もなく踏分、里離なる北の山陰に入られしに、何とやらゆかしく、其跡を慕ひしに女松村立、萩の枯垣まばらに、笹の編戸に犬のくゞり道のあらけなく、それより奥に自然の岩の洞静に片底を下して、軒は忍草、過にし秋の蔦の葉残り、東の柳が下に笈音なして、任せ水の清げに、爰に住なせる主はいかなる御法師ぞと見しに、思ひの外なる女の、蔦蘭て三輪組、髪は霜を抓つて眼は入方の月影幽に、天色の昔小袖に八重菊の鹿子紋をちらし、大内菱の中幅帯前に結びて、今でも其靚粧さりとては醜からず、寝間と思ふなげしの上に瀑板の額掛けて、好色菴としるせり、いつ焼捨のすがりまでも聞傳へし初音是なるべし、なを心も窓より飛いる思ひに成て、しばし覗きしうちに、最前の二人の男、案内しつた貌に嚙も乞ずして入ける、老女忍笑て、けふも亦我を



問れし、世には惱の深き調謔もあるに、なんぞ朽木に音信の風聞に耳うとく、語るに口重ねれば、今の世間むづかしく、爰に引籠て七年、開ける梅曆に春を覚え、青山かはつて白雪の埋む時冬とは知られぬ、邂逅にも人を見る事絶たり、いかにして尋ね渡られしといへば、それは戀に責られ是は思に沈み、いまだ諸色の限を辨へ難し、或人傳へて此道に來たるなれば、身の上の昔を時勢に語り給へと、竹葉の一滴を玉なす金盃に移し、是非の斷りなしに進めけるに、老女いつとなく亂れて、常弄し繩鳴らして戀慕の詩をうたへる事しばらくなり、其餘りに一代の身の徒さまくになり變りし事ども、夢の如くに語る、自ら抑々は卑からず、母こそ筋なけれ、父は後花園院の御時、殿上の交り近き人の末々、世の習とて衰ひあるにも甲斐なかりしに、我自然と面子透進に生れ付しとて、大内の又上もなき官女に仕へて、花車なる事ども有増に聞からず、猶年を重ね、勤ての後は、必悪かるまじき身を、十一歳の夏始めより、わけもなく取亂して、人任せの髮結姿も氣

にいらす、つとなしの投鳥田隠し結びの浮世髻といふ事も、我改めて物好み、御所染の時花しも明暮雛形に心を盡せし以來也、されば公家方の御暮は歌のさま鞠も色にちかく、枕隙なきその事のみ見るに浮れ、聞にときめき、おのづと戀を求めし情にもとづく折柄、あなたの通はせ文皆哀れに悲しく、後は捨置所もなく、物事はぬ衛士を頼みて、仇なる煙となすに、諸神書込し所は消ずも吉田の御社に散行ぬ、戀程おかしきはなし、我を忍ぶ人、色作りて美男ならざるはなかりしに、是にはさもなくて、去御方の青侍其身はしたなくて、いやらしき事なるに、初通よりして文章命も取程に、次第く書越ぬ、いつの頃かもだくと思ひ初逢れぬ首尾を賢、それに身を任せて浮名の立事をやめ難く、ある朝ぼらけに露れ渡り宇治橋の邊に追出されて、身をこらしめけるに、墓なや其男は此事に命をとられし、其四五日は現にもあらず寝もせぬ枕に、物は言はざる姿を幾度か恐ろしく、心にこたへ身も捨んと思ふ中に、又日數を經りて其人の事は更に忘れける、

是を思ふに、女程あさましく心の變るものはなし、自其時は十三なれば人も見ゆるして、よもやそんな事はと思はるゝこそおかしけれ、古代は縁付の首途には親里の別れを悲み泪に袖をしたしけるに、今時の娘さかしくなりて、仲人をもどかしく、身拵へ取急ぎ駕籠待兼、尻輕に乗移りて、悦喜鼻の先にあらはなり、此四十年跡迄は女子十八九迄も竹馬に乗りて門に遊び、男の子も定まつて二十五にて元服せしに、かくもまたせはしく變る世や、我も戀の蓄より色しる山吹の潮々に氣を濁して、思ふまゝ身を持崩してすむもよしなし

## 舞曲の遊興

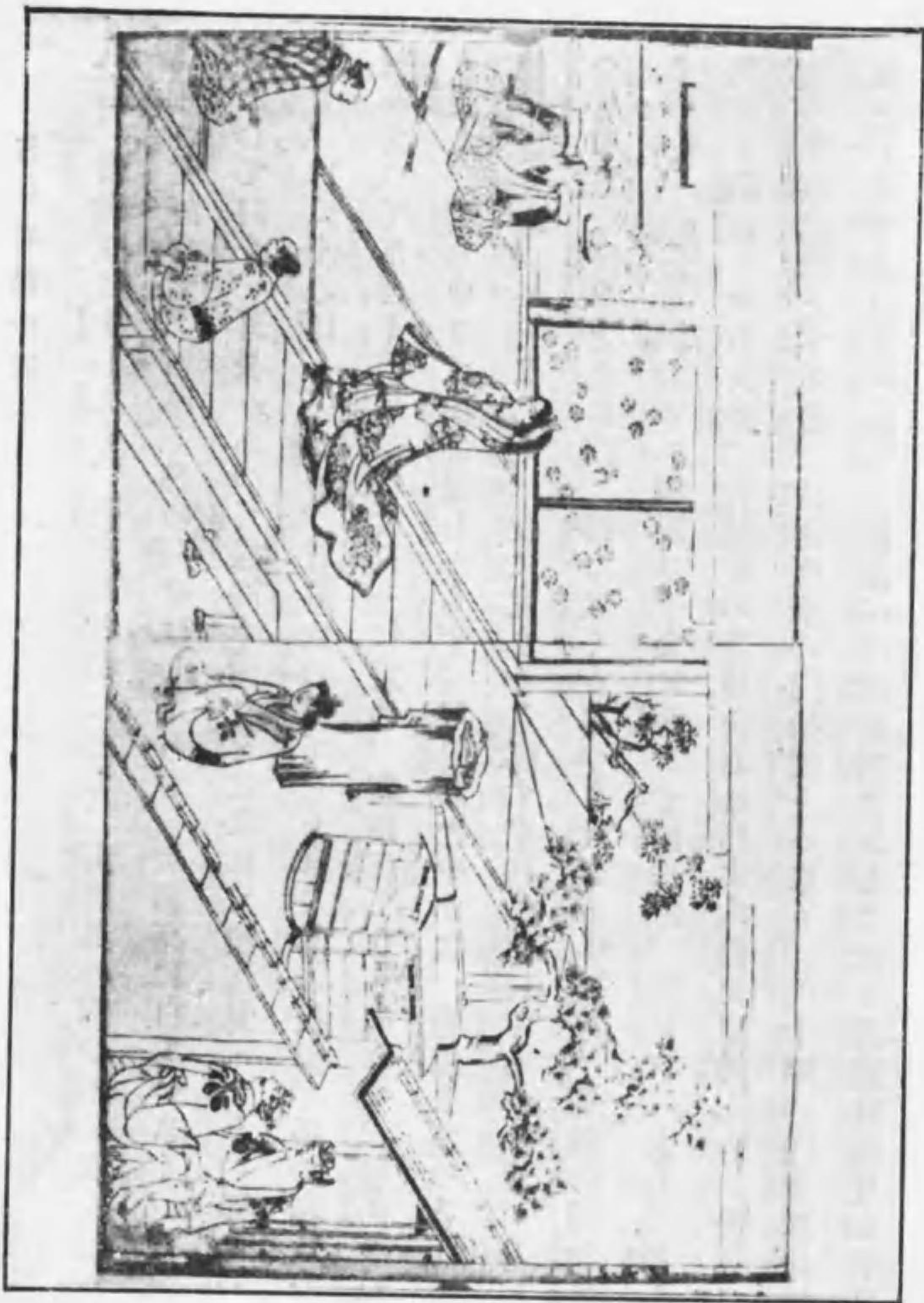
萬上京と下京の違いありと耳功者なる人のいへり、明衣染の花の色も移りて小町踊を見しに、里の總角なる振袖に太鼓の拍子、四條通迄は靜にゆたかにいかさま都めきけり、それより下は町筋かぎりて聲せはしく、足音ばたつき、かくもかは

る物ぞかし、一つ打つ手も間をよく調子を覚え、優れて見えける人は、人の中にての人也、萬治年中に駿河國安倍川の邊より、酒樂といへる座頭江戸に下りて、屋敷方の御慰に紙帳の中に入れて、鳴物八人の役を獨して間を合せける、其後都に上り藝をひろめけるに、殊更風流の舞曲を工夫して、人のために指南をするに、小女集りて是を世波に習へり、女歌舞妃にはあらず、麗しき娘を此業に仕入て、うへつ方の御前様へ一夜宛御慰みに上げる、衣装も大方に定まれり、紅返しの下着に、箔形の白小袖を重ね、黒さそぎ襟を掛けて、帯は三色左繩後結にして、金作りの木脇差、印籠巾着を下て、髪は中剃するも有、苞して若衆の如く仕立ける、小歌唄はせ踊らせ酒の挨拶、後には吸物の通ひもする事也、諸國の侍衆又はお年寄られたる方を、東山の出振舞の折ふし、五七人も打ちまぜたる風情は、又是よりはあるまじき遊興ものぞかし、男盛りの座敷へは少しぬる過て見へける、一人を金一角と定め置しはかるゆきなる呼物也、いづれを見ても十一二三迄の美少女





しくも女の琴基香歌の道にも志のありしは、昔此島に二の宮親王流れまし、  
萬其時の風義今に残れり、よき事は京にあるべしと家久しき奥横目、七十餘歳を  
すぎて物見るには目がねを掛、向齒疎にして鮎の風味を忘れ、香の物さへ細にお  
ろさせ、世に樂みなき朝夕を送り、ましてや色の道揮かきながら、女中同前の男  
心のうき立程大口いふより外はなし、然れども武士の勤め逆袴かた絹刀脇差は許  
さず、腰ぬけ役の銀錠を預かりける、是を京女の目利にのぼさるゝは猫に石佛、  
そばに置てから何の氣遣もなし、若ければ釋迦にも預られぬ道具ぞかし、寂光の  
都室町の吳服所笹屋の何がしにつきて、此度の御用は若代の手代衆には申渡さし、  
御隠居夫婦にひそかなる内談と申出さるゝ迄は何事かと心元なし、律義千萬なる  
顔付して、殿様お目掛を見立にと申されければ、それは何れの大名方にもある事  
なり、扱いかなる風俗を御望みと尋ねければ、彼親仁しま梧の掛物篋より女繪を  
取出し、大方は是にあはせて抱へたきとの品好み、是を見るに先年は十五より十





八迄、當世顔は少し丸く、色は薄花櫻にして、面道具の四つ不足なく揃へて、目は細きを好まず、眉厚く鼻の間せはしからず。次第高に口ちいさく、齒並あらあらとして白く、耳長みあつて縁淺く、身をはなれて根迄見へすき、額はわざとならず、じねんのはへどまり、首筋立のびてをくれなしの後髪、手の指はたよはく長みあつて爪薄く、足は八文三分に定め、親指反てうらすきて、胴間つねの人より長く、腰しまりて肉置遣しからず、尻付ゆたやかに、物越衣裳つきよく、姿に位備はり心立おとなしく、女に定まりし藝すぐれて萬にくらからず、身に黒子一つもなきを望みとあれば、都は廣く女はつきせざる中にも、是程の御物好み稀なるべし、然とも國の守の御願ひ千金に替させ給へば、世にさへあらば探し出す、其道を鍛錬したる人置、竹屋町の花屋角右衛門に内證を申渡しぬ、そもく奉公人の肝煎渡世とする事、捨金百兩の内拾兩とるなり、此十兩の内を又銀にして拾匁使する口鼻が取ぞかし、目見への間衣類なき人はかり衣裳自由なる事也、白小

袖一つ或は黒りんず上着に惣鹿子、帯は唐織の大幅にひぢりめんのかたの物、御所被に乗物ぶとん迄揃て、一日を銀貳拾目にて借(貸)なり、其女御奉公濟ば銀一枚とる事なり、賤き者の娘には取親とて、小家持し町人を頼み其子分にして出たり、此徳はあなたよりの御祝儀を貰ひ、末々若殿などもふけ、御持米の出し時も取親の仕合也、奉公人もよろしき事を望めば目見へするもむつかし、小袖の損料貳拾目、六尺二人の乗物三匁五分、京の内は何方迄も同じ事也、小女六分、大女八分、二度の食は手前にて振舞也、折角目見へをしても首尾せざれば、二十四匁九分の損銀、悲き世渡ぞかし、あるは又興に乗じ、大坂堺の町衆島原四條川原狂ひの際に、大鼓持の坊主を西國衆に仕立、京中の見世女を集め慰にせられける、目に入しを引とめ、しめやかに亭主を頼み、當座ばかりの執心、さりとは思ひよらず、口惜く立歸るをさまぐいひふせられて、さもしくも欲にひかれ、かりなる枕にしたがひ、其諸分とて金子貳歩に身を切賣是非もなき事のみ、それも貧

しからぬ人の息女はさもなし、彼人置の方より兼て見立し美女を、百七十餘見せ  
 けれど、ひとりも氣に入ざる事を嘆き、我を傳へ聞て小幡の里人より、住隠れ  
 し宇治に来て我を迎て歸り、取締なしにつみ見せけるに、江戸より持てまいり  
 し女繪に増りければ、外又穿鑿やめて此方望みの通萬事を定めて濟ける、是を國  
 上藤といへり、はるく武藏に連れ下られ、淺草の御下屋敷に入て、晝夜樂み、  
 唐のよし野を移す花に暮し、堺町の芝居を呼寄笑ひ明し、世にまた望みはなき榮  
 花なりしに、女はあさましくその事を忘れがたし、されども武士は掟正しく奥な  
 る女中は、男見るさへ稀なれば、まして禪の匂ひも知らず、○○○○○○○○  
 ○○○  
 ○○○  
 ○○○  
 ○○○  
 ○○○  
 ○○○  
 ○○○  
 ○○○  
 ○○○  
 御勤めしげく、朝夕近ふ召しつかはれし前髪にいつとなく御ふびんかゝり、女に  
 は各別の哀深く、御本妻の御事外になりける、是を思ふに下々の如く、恪氣とい

ふ事もなき故ぞかし、上下萬人戀を咎める女程世に恐ろしきはなし、我薄命の身  
 なから殿様の御情あさからずして、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○  
 年も若ふして地黄丸の御せんさく、一つも埒の明ざる事のみ、此上ながらの不仕  
 合、人には語られず、明暮是を悔むうちに、殿次第にやせさせ給ひ、御風情醜か  
 りしに、都の女のすきなる故ぞと、思ひの外に疑はれて、戀しらずの家老どもの  
 心得にして、俄に御暇出され、又親里に送られける、世間を見るに必生れつき  
 て、男の弱藏は女の身にしては悲き物ぞかし

淫婦の美形

清水の西門にて三味線弾て唄ひけるを聞ば、つらきは浮世哀れや我身、惜まじ命  
 露にかはらんと、其聲やさしく袖乞の女、夏ながら綿入を身に掛、冬とは覺てひ  
 とへなる物を着事、はげしき四方の山風今、昔はいかなる物ぞと尋ねけるに、遊

女町六條にありし時の後の葛城と名に立太夫がなり果つるならひぞかし、その秋櫻の紅葉見に行しが、それに指さし、あまたの女雑りに笑ひつるが、人の因果はしれ難し、我も悲き親の難義、人の頼むとて何心もなく商賣事請にたれし、其人行方なくて迷惑せられし金の替り、五拾兩にて我を自由とするかたもなく、島原の上林といへるに身を賣、思ひよらざる勤め姿、年もはや十六夜の月の都にならびなき逆、親方行末を悦ぶ、惣じて流れのこと業、禿立より見習ひわざと教へる迄もなし、其道の賢さを知りぬ、我はつき出しとて俄に風俗を作れり、萬町方の物好とは違へり、眉そりて置墨こく、小枕なしの大烏田、一筋掛のかくし結び、細疊の平元結をくれはかりにも嫌ひてぬき揃へ、貳尺五寸袖の當世仕立腰に綿入ず、裾ひろがりに尻付あふきに平たく見ゆるを好み、しんなし大幅帶しどけなくつゝ結びて、三布なる下紐つねの女より高く結びて、三つ重ねの衣装着こなし、素足道中くり出しの浮歩、宿や入の飛足、座敷つきのぬき足、階子登りのはやめ

足、兎角草履は見ずに履きて、前から來る人をよけず、情目遣ひ近付にもあらぬ人の辻立にも、見返りてすいた男のやうに思はせ、揚屋の夕暮端居して知る人あらば、それに遠くより目をやりて思案なく腰掛て、人さへ見ずば町の太鼓にも手に手をさし、其折を得て紋所をほめ、又は髪ゆふたるさま、或は時花扇何にてもしほらしき所に心を付、命をとる男目誰にとふて此あたまつきと、ひつしやりほんとかき立にして行事、いかなる帥もいやといはぬこかし也、いつぞの首尾にくどきかゝらば、我物とおもひつくより物もろふ欲を捨、大じんの手前よしなに申なし、世上の取沙汰の時も身に替てひくぞかし、すたる文引裂てかいまろめて、是をうちつけて人によるこばす程の事は、物も入ずしていと易きなれども、うつけたる女郎はせぬ事也、其形は人にも劣らずして、定りの紋日も宿やへ身上市の御無心、男ありて待顔には見せけれども、宿よりそこ〜にあしらひ、片陰によりて當座漬の茄に、生醬油を掛けて、膳なしに冷食くふなど、外の人が見ねば





い筈也、今の世のよねの好ぬる風俗は、千筋染の黄むくの上に黒羽二重の紋付すそみじかに、帯は龍門の薄樺、羽織は紅齋にして八丈紬のひつかへし、素足に藁草履はき捨、座敷つきゆたかに脇差少しぬき出し、扇遣ひして袖口より風を入、しばしありて手水に立、石鉢に水はありとも改めて水かへさせて静に口中など洗ひ、禿いひやりて供の者に持せ置し、白き奉書包の煙草取寄せ吞など、延の鼻紙膝近く置て、かりそめ遣ひ捨、舟引女郎を招き寄せ手を少し借りたいと、袂より内に入させ、けんべけにすへたる灸をかゝせ、太鼓女郎に加賀ぶし望みて歌ふて引を、それをも心をとめて聞ず、小歌の半に末社に咄掛、きのふの和布袴の脇は高安はだしと譽め、此中の古歌を大納言殿にお尋ね申たが、拙者さいた通り在原の元方に極まりたなどいたり物語、二つ三つ頭にそゝらずして、萬事おとしつけ居たる客には太夫氣をのまれて、我と身にたしなみ心の出来て、其男する程の事かしく見えて恐ろしく、位とる事は脇になりて機嫌をとる事になりぬ、一切

の女郎の威は客からの付次第にして奢もの也、江戸の色町さかんの時、坂倉といへる物師、太夫ちとせに親しくあひける、此人酒よく吞なして、いつとても肴に東なる最上川にすみける花蟹といへるを鹽漬にして是を好る、有時坂倉此蟹のこまかなる甲に、金粉をもつて狩野の筆にて笹の丸の定紋かゝせける、此繪代ひとつを金子一步つゝに極め、年中ことのかげざる程千とせ方へ遣しける、京にては石子といへる分知太夫の野風にしみて、世になき物時花物人より早く調へける、野風秋の小袖懷色にして惣鹿子此辻を一つく紙燭にてこがしぬき、紅ゐに染し中綿穴より見えすき、又もなき物好、着物一つに銀三貫目入けると也、大坂にてもすぎにし長崎屋出羽あげ詰にせし二三といへる男、九軒に折節の秋の淋しき女郎あまた慈悲買にして、太夫出羽を慰めける庭に一むらの萩咲て、晝は露にもあらぬに打水の葉末にとまりしを太夫深く哀み、此花の陰こそ妻思ひの鹿のかり床なれ、角のありとても恐ろしからじ、其生たる姿を見る事もがなといひければ、

それ何より安しとて俄に裏座敷をこぼたせ、千本の萩を植て野を内になし、夜通しに丹波なる山人にいひやりて、女鹿男鹿の敷をとりよせ明の日見せて、跡は昔の座敷となりけると傳へし、身に備はりし徳もなくて、貴人もなるまじき事を思へば、天もいつぞは咎め給はん、然も又すかぬ男には身を賣ながら身を任せず、つらくあたりむごく思はせ勤めけるうちに、いつとなく人我を見はなし、明暮際になりて、自太夫職をとりて、すぎにし事どもゆかし、男嫌ひをするは、人もてはやしてはやる時こそ、淋しくなりては、人手代、鉦たゝき、短足、すぐちに限らずあふを嬉しく、思へば世に此道の勤め程悲きはなし

# 好色一代女

## 卷二

### 目録

淫婦中位

自慢姿ほどもなくむくひの種  
 天神にさがり口買置  
 算用は合はぬ昔の男  
 皆々かはるならひぞかし

分里數女

十五半夜それ／＼の勤め程  
 世にかしきはなし  
 揚屋の別れも局のさらばも  
 名残は惜き三藏様

世間寺大黒

なるれば人焼匂ひも  
白菊といへる伽羅に替らず  
魚はくふぬれはあり  
寺程住むによき所はなし

かへすくゝ戀知りと

思ひ參らせ候

金で作りし男も

いつとなくおとろへて

人ころし様まゐる

諸禮女祐筆

梅いき天神のつくり花 此匂ひきかすに一代鶯 口のあき所がない

鹿も鳴はおもしろし 床のにしきも 本も見ふるし

大黒殿のたはらは 戀のかくし所此寺にはみびすの鯛も有

女の筆のはたらくは かへすくゝいたづらとおもひ參らせ候

淫婦中位

朱雀の新細道を行きて、鳥原の門口につゐに見ぬ圖なる事あり、大津馬に四斗入の酒樽を乗下に付、立島の布子に鍔なしの脇指、竹の小笠をかづき、右に手綱、左に鞭持て、心のゆくに任せて歩ませ行に、揚屋町の丸屋七左衛門方へ馬方先立て送り状を渡しぬ、越後の村上より此人女郎買に上らるゝの由、随分御馳走申、其里の遊興の後、大坂も見るべきとの望み、住吉屋か井筒屋へそれより人を添らるべし、諸事其元わけよく、我等同前に頼むと御狀付られし御方は、越後の幅さまとて、前の吉野様の御客、今の世には稀なる大臣様、中二階の譜請を御一人し



て遊ばし、よき事は今に忘れず、それよりの御引合少しも如在は先是へと、馬引掛て様子を見るに、よね狂ひの風儀にはあらず、都のものに馴たる男ども何とやら心元なく、おまへ様の傾城狂ひなされますかと言へば、田舎大臣苦い顔をして此人が買れますと、革袋一つ投げ出せば、梧のとの角なる物三升程打ち明、今幕かぬる一步を一握づ、蒔きければ、添なしと夕暮の寒空になる質どもを請ける、其後お盃といへば、我國酒を吞つて外なるは氣は入らず、扱はるゝより樽二つ此酒の有切に遊ぶなれば、始末して我獨に吞せよといへば、京の酒がお氣にいらずば女蕨様もやはらかにしてお氣に入まじ、いかなるお物好太夫様お目に掛よといふ、大臣笑つて床も構はず心入もしまぬ物、是より美きは此里に又なきといふ太夫を、見る迄もなし取寄よといふ、しかしお慰にもと此夕ざれの出掛姿はしるして見せまいらすに、金銀の團にて一人くの御名を教へける、太夫とはいはで金の團をかざし、天職は銀の團にてしらす、其道に賢き仕業也、我太夫と呼ばれ



し時、賤からぬ先祖を鼻に掛ぬ、公家の娘やら紙屑拾ひの子やら人はしらぬ昔ぞかし、殊には姿自慢して手の見えたる男には言葉もかけず、高ふとまつて鶏鳴別れにも客を送らず、何れの人もいやな顔してすましかれば、をのづと此沙汰あしく、次第に淋しく勤めかければ、親方持こたへず、一門内談して天神に下しけるに、はや其日より引舟女郎もなく、寢道具を替りて蒲團二つになし、末々も腰をかゞめず、様付し人も殿になり、座付も上へはあげず、口おしき事日に幾度か、太夫の時は一日も宿にて暮さず、二十日も前より遣手を頼み、日に四五軒から貰はれ、揚屋から人橋かけてそこからそこに行にも、向ひ人送り人さゞめき渡りしに、今は又ちいさき禿一人連れて、足音も静に大勢の中に混りて行きしに、丸屋の見世なる越後の客始めて見し戀となり、あの君よと言ひしに、けふより天職に下り給ふといふ、我等は國元のせいばかりなれば、太夫でなくば望みなし、あまた見盡せし中に、あれほど美きはまたもなきに、天神になしけるは内證に悪き事

のありやと、是非に叶はぬ取沙汰せられて、きのふ迄嫌ひし男にあひ、座敷もしめて見ても脇からくずされ、持馴し盃を取おとしする事云程の事不出來に、床も客恐ろしくなつて氣に入心の仕掛、身拵も早く伽羅も始末心つきて焼かね、上する男お床は二階へと呼立れば、只一二度にて尻輕に立行、宿の噪つる戸口迄つきてぎよしんなりましたかと、お客に申、女郎にはもお休みなされませいと、口早に云捨て階子ありさまに、爰は蠟燭消して油火にせよ、高蒔繪の重肴は大座敷へ出せといふたに、誰才覺ぞと下女白眼など、しれたる事ながら聞を構はずいはれしは、是女郎の威のなき故に萬かくこそかはれ、むやくしき事此外聞寢入にするを、男に起され心任せの首尾して後、情らしく親里を尋ねけるに、欲の心から残さず語りて、おのつと打とけ、正月の仕舞も我と頼み、大方に請合ふを嬉しく、二度目になれし別れには、出口の門迄送り、面影見果つる迄立盡し、其跡より便求めて三枚重の文遣はしける、太夫の時は五七度も心よく逢馴し後も便りはせざり

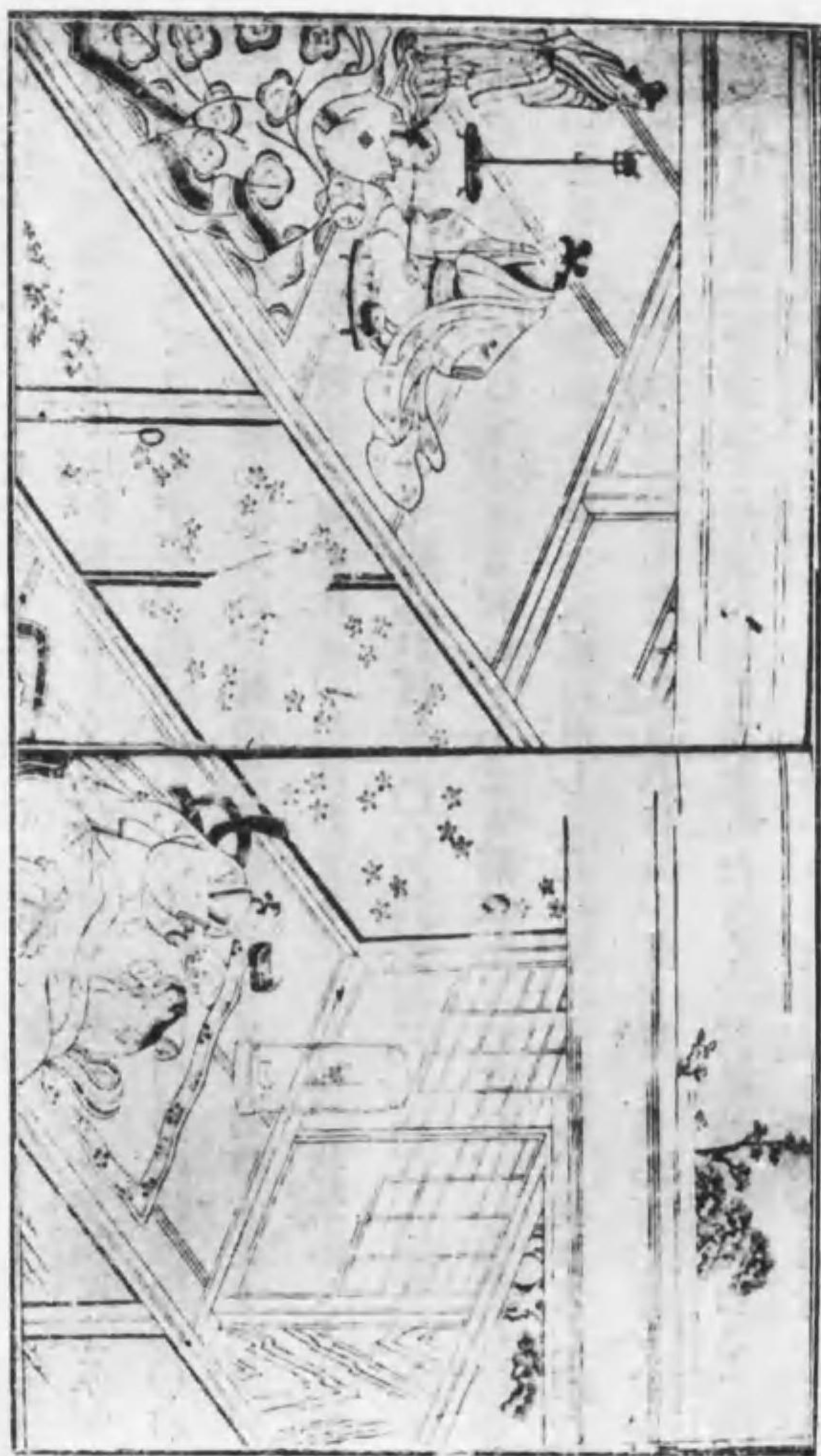
き、引舟遣手氣をつけ、それ様へ御状一つと、機嫌のよき折節を見合せ、お硯の墨すりて奉書取てあてがひけるに、お定りの文章そこ／＼に書散し、人に疊ませ結ばせて上書して投遣さへ忝なく拜し参らす、いよ／＼今迄に替らずかはゆがられたしなど、返事を引舟方迄遣はし、遣手迄大判三枚、小袖代として給はりし事、其時は世にほしがかる金銀も珍らしからず、それ／＼に取らせけるに何惜からじ、太夫の人に物遣るも、思へば博奕の場にての錢の如し、ない時の今は恥捨て御無心申甲斐なし、惣別傾城買その分際より仕過す物也、有銀五百貫目より上のふりまはしの人太夫にもあふべし、二百貫目迄の人天職苦しからず、五十貫目迄の人十五に出合てよし、それも其銀働かずして、居喰の人は思ひもよらぬ事、近年の世上を見るに、半年つゞかさる人無分別に騒ぎ出し、二割三割の利銀に出しあげ、主人親類の難義となしぬ、かやうになるを覺へての慰み何か面白かるべし、浮世とてさまざま、我天職勤めけるうちに、頼みに掛し客三人迄ありしに、一人

は大坂の人なるが、檳榔子の買置して家を失はれける、又一人は狂言芝居の銀元にて大分の損立、またの一人は銀山にかゝる所あしく、二十四日のうちに三人共に埒明、此里の音信も絶て俄に淋しきさへうきに、耳の下に霜ふり月の頃、粟粒ほどなる物いつとなくなやまして、其跡見苦しく、是又つらきに流行風にして、我黒髪うすくなりて人なを見捨ければ、恨みて朝夕の鏡も見捨にける

## 分里數女

町人の末々迄脇指といふ物さしけるによりて、云分喧嘩もなくて治まりぬ、世に武士の外刃物さす事ならずは、小兵なる者は大男の力の強きに、いつとても鬪られ物になるべき、一腰恐ろしく、人に心を置によりて、いかなる間の夜も獨は通るぞかし、傾城は浮氣なる男をすけるによりて、小尻咎め出来達にして命の果つるをも更に覺へず、我女郎なれば逆義理には身を捨る事、其座はさらじと明暮思

ひ極めしに、是程身の悲きにも相手なしには死なれぬ物ぞ、自ら太夫から天神に下されけるさへ口惜かりしに、今又十五になされ勤めけるに、昔の氣立入替り萬事其時の心になる物ぞかし、初めてお客と呼に来ると、一つも賣るを仕合に、其男見に遣る迄もなく、もし又入らぬとてへんがへせられては、けふの隙日のせつなさに取急ぎ行くさへ、揚屋の男目が耳こすりいふは、十五位の女郎は、人遣ると否や使と連れて来る人を呼べ、悪女郎の癖に身拵へそれだけ損じやは、十八匁の物を九匁も人が出すにこそと聲高にわめくもつらし、内儀も見ぬ顔して言葉をも掛られず、手持わるく臺所に上れば、丹波口の茶屋がそこに居合せ、其二階へ上れと指圖をする片手に、尻さぐるなど、少しは腹立ながら座敷に入て見れば、大臣の數程太夫も有、連衆には天神かたづき、お機嫌取の若男四五人もありしか、其中へつきませに呼ばれて、どれにあふとも定めもせず、下座に直りて行處のない時の盃さゝれ、酒はかいしき請ねども、誰氣をつけて挨拶する人もなく、つゐ



隣となりの太鼓女郎たづねにさして日の暮くるを待まち兼かね、○○○○○○○○○若い男わかの小意氣こいきすぎたる風俗ふうぞく、正ましく町ちやうの髪結かみむすらしく思おもはれける、此男こゝろやう細奥町上八軒こまほりてうへの茶屋ちやう遊びあそびの諸分しよわけならでは知らずや、○○○○○○○○○  
 ○○○○○○我われへの全盛ぜんせいと思おもふか、枕まくらの燈火とうし近く寄よせて、前巾着まへきんぎょより一歩いっ一つ豆板まめいた  
 三拾目程さんじゆくぢやう、幾度いくたか數讀かずよみて見みせける、是こゝろはあまりなる男おとこめ、物云ものいひかゝるに俄にわかに腹痛はら痛いたひとて返事へんじもせず、背せきて寢ね入いれば、○○○○○○○○○私わたくしの苦手藥くでんやくなりと、夜明方よあけ迄までさすりける程ほどに、あまり痛いたはしく思おもはれ、○○○○○○○○○  
 ○○○○こちらへ寢ねかへる時とき、大臣だいじんの聲こゑして夜よの明あけに程近ほどちかし、我われは先まへ歸かへれ、髪結かみむす人も待まちかねんと、何なにの遠慮えんりょもなく起おきされける、是こゝろを聞きと又また心ざし替かり、先まに見立みだし職しやくの人ひとなれば、重ねかさねて浮名うきなの出でる事ことをうたてく、其通そのとほりに起別おきわかれぬる、太夫天神たふてんじん迄勤つとめし内うちは、さのみ此道みち迎むかへうきながらうきとも覺おぼへず、今いまの身みの悲かなし事ことかくも又また昔むかしに替かる物もの哉かな、野暮のぼろはいやなり、中位ちゆうゐなる客きやくはあはず、帥すいなる男おとこめにたまた

まあへば○○○○○○○○○扱あもせはしや、おふくろ様さまの腹はらに十月じゆがつよくも御入ごいりましたなどいふて、少しは子細こさいらしく持もて參まゐれば、此男こゝろいひも果はぬに、○○○○○○○○○  
 ○○○○○○それを四よの五ごのいへば、むづかしい事は御座ござらぬ、さらりといんで貰もらひまして女郎ぢやうらうかへて見みましよといふが、鼻息はないきに見みへすき、此男こゝろこはく身揚みあげなを怖おそろしく、帥すいと思おもふとちやくと言葉ことばに色いろを付つて、わけもない事遊あそばして、お敵様たかさまへの洩はれての御申分ごまゐりは、こち存ぞんじませぬなどいふが、十五女郎かごいの必かなおとし也なり、それより品下しんげりて、端局はしつまねの事共ことどもいふに限かぎもなく、聞きて面白おもしろからず、それもそれ／＼に大方仕掛しかけ定ぢやうまつての床言葉とこごゑ有あり、先三夕取さんせきとはさのみ賤しやんからず、客上きやくあがればゆたかに内うちに入いり、其跡そのあとにて木綿着物きわた着きたる禿かぶが○○○○○○○○○  
 ○○○○○○切戸きりどより内うちに行いき、同店どうてんの女郎ぢやうらう乍あはら、是



せちがしこき事を、我も京より十五を下りて、新町に賣られて、二年も見世を勤めし内に、世のさまざま見及び、十三の年明て、頼む島もなき淀の川船に乗て二度古里にかへる

## 世間寺大黒

脇ふさぎを又明て、昔の姿に返るは、女鐵拐といはれしは、小作りなる生れつきの徳也、折ふし佛法の晝も人を忍ばず、お寺小性といふ者こそあれ、我耻かしくも若衆髪に中剃して、男の聲遣ひならひ、身振も大方に見て覺へ、下帯かくも似物かな、上帯も常の細きにかへて、刀脇指腰定めかね、羽織編笠も心をかしく、作り髭の奴に草履もたすなど、物に馴たる太鼓持をば連、世間寺の有徳成を聞出し、庭櫻見る氣色に、扉重門に入れば、太鼓方丈に行て、隙なる長老に何か小語、客殿へ呼ばれて彼男引合はすは、こなたは御牢人衆なるが、御奉公濟さるう

ちは、折ふし氣慰に御入あるべし、萬事頼みあげるなどいへば、住寺はや現になつて、夜前あなた方入ひて、叶はぬ子風薬を、去人に習ふて參つたといふて、跡にて口塞ぐもおかし、後は酒に亂れ、勝手より醒き風も通ひ、一夜づゝの情代金子貳歩に定め置諸山の八宗、此一宗をすゝめ廻りしに、何れの出家も珠數切ざるはなし、其後はさる寺のなづみ給ひ、三年切て銀三貫目にして、お大黒様になりぬ、此日數ふる内に、浮世寺のおかしさ、昔は念比なる坊中ばかり集りて、諸佛祖師の命日をよげ、一月に六齋づゝ、是より外はと誓文の上、魚鳥も喰ひ、女狂ひも其夜に限りて三條の鯉屋などにて遊び、常は出家の身持なる時は、佛も合點にてゆるし給ひ、何のさはりもなかりき、近年繁昌に付て亂りがはしく、晝の衣を夜は羽織になし、手前に女の置所、居間の片隅を深く掘りて、明取の隠し窓細く、天井も置土して壁壹尺餘り厚く付て、物云ふ聲の外へ洩らさず、奥深に拵へ、晝は是に押込まれ、夜は寢間迄も出ける、此氣のつまる事、戀の外なる身過なれば、







て人の息女を預かる事大方ならずと、毎日怠らず清書を改め、女に入程の所作を教、身の徒ふつくと止めて、何の氣もなかりしに、戀を盛の若男遺練の文章を頼まれ、昔勤めし遊女の道は、さして取比翼連理の根心を辨へて、其壺へはまりたる文柄に惱せ、又は人の娘なる氣を見すかし、或は物馴手だれの浮世女にも、それ／＼の仕掛ありて、何れか靡けざる事なし、文程情知る便外にあらじ、其國里遙なるにも思ふを筆に物いはせける、いかに書續けし玉章も、偽り勝なるは自見覺のして捨りて惜まず、實なる筆の歩みには自然と肝にこたへ、其人にまざまざとあへる心地せり、我色里に勤めし時、あまたの客の中にも勝れて悪からず、此人にあふ時は更に身を遊女とは思はず、うち任せて萬しらけて物を語りけるに、其男も我を見捨ざりしに、事募りてあはれぬ首尾をかなしく、日毎に音信の文忍ばせけるに、男あひ見る心して、幾度か繰返して後、獨寝の肌を抱て、いつとなく見し夢に、此文自が面影となり、夜すがら物語せしを、そば近く寝たる人ども





# 好色一代女

## 卷三

### 目録

町人腰元

養生しらずの命

一代村男を氣の短き女有

人はしれぬ物ぞかし

腰元のおゆきが仕掛

表使の女役をせし時

おした屋敷の恪氣講

さてもくおそろしや

御前様の顔つき今に忘れ難し

妖孽寛潤女